Hokkaido University News

北大時報

令和2年

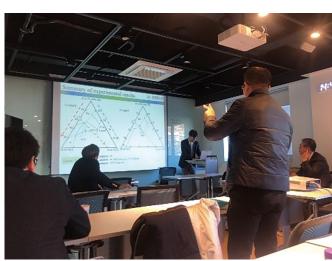
1

No. 790 January 2020

大学入試センター試験の実施 第22回ソウル大学校-北海道大学ジョイントシンポジウムを開催









ASEANハノイオフィス開所式



本学初の南極地域観測隊長, 氷と海の関係 解明に挑戦

■ 全学ニュース

- 大学入試センター試験の実施
- 第22回ソウル大学校-北海道大学ジョイントシンポジウ 2 ムを開催
- 各省庁・メディアが選ぶ注目研究2019に、本学から3名 の研究者が選出
- 本学初の南極地域観測隊長、氷と海の関係解明に挑戦
- Academic Fantasista 10月は8名の研究者が札幌市内 の高校で講義を実施
- 北大フロンティア基金
- リスクアセスメント研修を開催
- 15 新渡戸学 (フェローゼミ) の全体発表会を開催
- 2019年度冬季国際交流会~広がる・つながり、Connecting 16 with others ~を開催
- 大学の世界展開力強化事業合同連携会議・ラウンドテーブル 17 「サステイナビリティを探求する大学院教育とは何か」を開催
- 第2回ICReDD国際シンポジウムを開催 18
- 「北海道大学新技術説明会」を開催
- 20 「北海道大学起業家育成基金」を創設
- 産学連携推進本部 本間特任教授が「国際認定・技術移 転プロフェッショナル:RTTP」に認定
- 国際連携研究教育局 (GI-CoRE) ビッグデータ・サイバーセキュリティグローバルステーション (GSB) が「ビッグデーター イバーセキュリティ・IoTに関する国際シンポジウム」を開催
- ベトナム社会主義共和国ハノイ市にてASEANハノイオ フィス開所式及び北海道大学交流デー等のイベントを開催
- ガーナ共和国の首都アクラで「日本留学フェア」を開催
- ヘルシンキにて日本学術振興会フィンランド同窓会10周 年・日本フィンランド国交樹立100周年記念セミナーを開催
- 日本留学海外拠点連携推進事業主催 日本留学フェア
- (於ロシア連邦・ウラジオストク)を開催 在日豪大使館コート大使、クーパー公使の表敬訪問及び グリーン在札豪領事への北海道大学アンバサダー委嘱状 交付式を開催
- 中学生対象「AIとデータサイエンスを知って親しむ講 義×体感イベント」開催
- 小中高生向け科学体験イベント「さっぽろサイエンス 30 フェスタ in 北大」を開催
- 博士人材と企業の情報交換会 第41回「赤い糸会&緑の 31 会」を開催
- 外国人博士人材と企業の情報交換会CAREER LINK MEETUP (英語版赤い糸会) を開催
- 33 博士課程学生の海外企業訪問 USA Site Visit in RTPを 開催
- 工学研究院及びサステイナブルキャンパスマネジメント本 部の取組が「サステイナブルキャンパス賞2019」を受賞
- 令和元年度第2回サステイナブルキャンパス推進員会議 を開催

▮ 部局ニュース

- 公共政策大学院が金融庁グローバル金融連携センター研 究員との交流会を実施
- 経済学部・経済学院インターナショナル・サポート・デ スク(ISD)説明会を開催
- 生命科学院がアクティブラーニング形式の「Research Ethics Workshop for IGP students (研究倫理ワーク ショップ)」を開催
- 生命科学院が「第7回生命科学国際シンポジウム」を開催
- 「第15回北海道大学 南京大学ジョイントシンポジウム -NIMS」を開催
- 先端生命科学研究院の研究グループが、報道関係者向け研究成果発表会を実施~アルツハイマー病発症予防にこ んにゃくセラミドが有効であることを発見~ 歯学研究院で「動物供養祭」を挙行
- 40
- 令和元年度 薬学部成績優秀賞授与式を挙行 41
- 第2回東アジアイノベーション促進フォーラム (East Asia Innovation Accelerator Forum)を開催
- 工学系部局で「第2回こころの健康セミナー」を開催
- 北海道大学病院で「第61回ふれあいコンサート クリス マスの夕べ」を開催
- 環境科学院でインターナショナルパーティを開催
- 新専攻設置記念公開シンポジウム「観光とメディアの融 合が開く新たな可能性」を開催
- 低温科学研究所が基礎生物学研究所と連携協定を締結 45
- 2019年度北極域課題解決人材育成講座「北極域科学概論」 開催報告
- 第8回北極域オープンセミナーを開催 47
- スラブ・ユーラシア研究センター 2019年度冬期国際シンポジウム「帝政ロシアの地方再訪:文学的想像力と地 政学」を開催
- 中谷宇吉郎揮毫の書画を大学文書館で受贈

■ 博士学位記授与 50

■ 諸会議の開催状況

▮学内規程 52

▋研修

- 令和元年度国立大学法人北海道大学会計職員アドバンス 研修「データ収集・分析力研修」
- 令和元年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員 SD研修

■ 表敬訪問

人事

▮訃報

名誉教授 鈴木 旭 氏



新渡戸学(フェローゼミ)全体発表会を開催



第2回ICReDD国際シンポジウムを開催



環境科学院でインターナショナルバーティ



低温科学研究所が基礎生物学研究所と連携 協定を締結

表 紙:第22回ソウル大学校-北海道大学ジョイントシンポジウムを開催(関連記事2頁に掲載)

裏表紙:北の鉄道風景® 鉄馬駆ける

■全学ニュース

大学入試センター試験の実施

令和 2 年度の大学入試センター試験が、 1 月18日(土)、19日(日)の両日、全国一斉に実施されました。

本学においても、大学入試センター試験実施体制により、実施本部、総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部 を設置し、本学教職員等延べ約1,200人の協力を得、平穏のうちに終了しました。

全国の志願者は、前年度より19,131人減少し557,699人でした。道内の志願者は、前年度より139人減少し17,861人となり ました。

本学が担当する試験場(藤女子大学試験場を含む)の志願者数は、昨年より109人少ない4,906人で、各試験場(会場)の 受験状況は次のとおりです。

(学務部入試課)

令和2年度大学入試センター試験受験状況

	В	程		1月18日(土)							1月19日(日)									
	教	科	地理歴史		国	ia.	外間		英 【リス=	語ニング】	英 【リスコ 再開ラ	ニング】	理和	4 1	数章	* 1	数章	* 2	理相	¥ ②
試	策場 (会場) 名・志願者数		受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	辞退者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数
	農学部会場	537	525	12	526	11	526	11	526	11			0	537	526	11	525	12	526	11
	人文·社会科学 総合教育研究棟会場	691	664	27	666	25	667	24	665	26			0	691	662	29	659	32	660	31
	理学部会場	410	202	208	315	95	357	53	327	83			283	127	352	58	300	110	138	272
北海道大	工学部会場	558	470	88	484	74	473	85	446	112			257	301	293	265	241	317	226	332
北海道大学試験場	高等教育推進機構 A 会場	678	547	131	587	91	571	107	502	176			92	586	111	567	44	634	0	678
*90	高等教育推進機構 B会場	764	731	33	732	32	735	29	729	35			677	87	688	76	661	103	0	764
	保健科学研究院会場	399	186	213	310	89	324	75	297	102			205	194	277	122	201	198	40	359
	高等教育推進機構 N会場	14	11	3	11	3	11	3	11	3			4	10	9	5	9	5	7	7
	藤女子大学試験場	500	465	35	467	33	464	36	454	46			385	115	384	116	359	141	0	500
	札幌地区 小計 4	4553	3,801	750	4,098	453	4,128	423	3,957	594			1,903	2,648	3,302	1,249	2,999	1,552	1,597	2,954
		4,551	83.5%	16.5%	90.0%	10.0%	90.7%	9.3%	86.9%	13.1%			41.8%	58.2%	72.6%	27.4%	65.9%	34.1%	35.1%	64.9%
北	毎道大学水産学部試験場	355	339	16	341	14	339	16	337	18			152	203	335	20	303	52	178	177
	合 計	4,000	4,140	766	4,439	467	4,467	439	4,294	612			2,055	2,851	3,637	1,269	3,302	1,604	1,775	3,131
		4,906	84.4%	15.6%	90.5%	9.5%	91.1%	8.9%	87.5%	12.5%			41.9%	58.1%	74.1%	25.9%	67.3%	32.7%	36.2%	63.8%

※欠席者には当該教科を「受験しない」と申請し登録していない者も含まれる



受験風景

第22回ソウル大学校-北海道大学ジョイントシンポジウムを開催



参加者集合写真

11月14日 (木), 15日 (金) に, 韓国ソ ウル大学校 (Seoul National University, SNU) と本学のジョイントシンポジ ウムを開催しました。両大学の合同シ ンポジウムは、平成10年より毎年交互 にホスト校となる形で開催されてお り、第22回となった本シンポジウム は,『人工知能 (AI) 時代における, 大学の挑戦と機会』というテーマの 下, SNU冠岳キャンパスで行われま

今回の参加が初めてとなるSNU オ・セジョン学長の開会挨拶に続き. 本学笠原正典総長職務代理の挨拶, SNUク・ミンギョ国際部署の長によ る各参加分科会の紹介を以て, 全体会 が開会しました。基調講演として, SNUビッグデータ研究所創設者であ る電気・情報工学部チャ・ソンギュン 教授からは, ビッグデータ, コン ピューティング, AI・アルゴリズム の流れが説明され,次いでデータサイ エンス大学院を開設し, 生物, 環境科 学, 物理学, 社会科学等情報科学以外 の学部生を集めて共同教育を行い, データサイエンスの恩恵を広く行き渡 らせるというSNUの新イニシアティ ブが紹介されました。続いて、本学情 報科学研究院の川村秀憲教授からは、 グルメレビューサイト, ファッション 通販サイトへのAI応用, 競輪の結果 予想, 漁網やロードヒーティング設置 路面での積雪感知での経費節約に資す る等、様々な分野での実用例が示され ました。

今年度は7部局から8分科会が催さ れ、同時期に開催が可能であった分科 会から約100名が全体会に参加しまし た。第23回は令和2年に本学で開催す る予定です。

プログラムはホームページの「国際 的な学術交流」のページに掲載してい ますので、ぜひご覧ください。

♦https://www.hokudai.ac.jp/ international3/internationalization/ academicexchanges/jointsymposium/



SNU音楽大学学生による、伝統音楽演奏



SNUチャ教授



SNU才学長と北大笠原総長職務代理



全体会の様子



本学川村教授

分科会1

International Workshop on New Frontiers in Convergence Science and Technology for Artificial Intelligence

複合領域科学及び人工知能のニューフロンティアに関する国際ワークショップ/情報科学研究院 教授 平田 拓

情報科学研究院・学院はソウル大学 校側のカウンターパートであるGraduate School of Convergence Science and Technology (GSCST) と分科会を開催 しました。GSCSTは、複合領域(ナノ マテリアル、バイオ、情報科学) の分 野を対象とする研究科です。今回は. 情報科学研究院から齊藤晋聖教授、吉 岡真治教授,川村秀憲教授,平田 拓 教授の4名が参加しました。また、大 学院生3名も参加しました。

分科会 International Workshop on New Frontiers in Convergence Science and Technology for Artificial Intelligence は、11月15日にGSCSTの 講堂で開催されました。分科会に先立 ち、北大の教員がSung-Joon Ye研究 科長を表敬訪問しました。分科会で は、北大の教員4名とソウル大の教員 4 名が研究発表を行い、両大学の大学 院生10名もポスター発表を行いまし た。全体では、北大の教員4名、院生 3名, ソウル大の教員9名, 院生46 名、合計62名の参加となりました。飛 行機の時間の関係でタイトなスケ



ジョイントシンポジウム分科会の集合写真

ジュールでの訪問でしたが、両大学の 教員はもとより大学院生同士も交流 し、相互理解を深めることができまし た。今回は、国際連携機構の支援によ り大学院生3名を派遣することができ ました。

(情報科学研究院)



分科会の参加者

Teacher Education Forum: Preparing Thinker Teachers and 2019 SNU-HU-NTNU-KU Joint Symposium for Science Education

教師教育フォーラム: 思索する教師をつくる & 2019年理科教育のためのSNU-HU-NTNU-KUジョイントシンポジウム/教育学研究院 教授 大野栄三

本分科会は、カセサート大学(タイ 王国・バンコク)で、カセサート大学 教育学部50周年記念行事と合わせて開 催されました。カンボジア、ミャン マー、インドネシアからも本分科会へ の参加があり、活発な研究討議を行う ことができました。

第1日目は地方州立の小学校を見学 しました。公立小学校ですが、カセ サート大学教育学部の協力の下, 算数 や理科などの授業をすべて英語で行う

という挑戦的な取り組みが実践されて いました。小学生が教師の質問にしっ かりと英語で答えていました。第2日 目はカセサート大学教育学部50周年記 念行事に参加しました。「Thinker Teacher」をキー・ワードに、基調講 演とパネル討論からなる充実した内容 でした。記念行事の後に設定された ミーティングでは, 各国から参加した 大学間で、今後の相互交流について意 見交換を行いました。第3日目が本分

科会でした。カセサート大学の大学院 生が, 研究発表, 分科会の運営で大活 躍していました。また、若手同士でも 活発な研究交流ができたようです。次 回は本学で開催する予定です。

(教育学研究院)



要旨集表紙



分科会の様子

分科会3

SNU-HU-MU Joint Class: Environmental Chemicals and Human Health

SNU-HU-MU共同講義:環境化学物質と人びとの健康/環境健康科学研究教育センター 特任准教授 荒木敦子

11月21日 (木)・22日 (金) に、本 分科会を開催しました。本分科会は5 回目の開催であり、Seoul National University (SNU), Mahidol University (MU) との協同講義とし ては4回目となります。本学を含む3 大学に所属する教員10名及び大学院生 29名が参加しました。環境化学物質の 曝露評価や生体モニタリング等の基礎 知識に加えて、大気汚染と健康問題、 室内環境, e-Waste, 胎児期の化学物 質曝露と子どもの健康, 化学物質管理 に関する, 幅広い講義が提供されまし た。加えて、3大学に所属する大学院 生の混合構成による4組が事前学習と して情報収集や討論を行い、その成果 を発表しました。環境保健、環境疫学 を専門とする大学院生のみならず,本 学からは保健科学院、医学院、獣医学院、国際感染症学院、経済学院、工学院、環境科学院に所属する大学院生が参加し、留学生も多く参加したことから、国際色豊かで多様な視点を持つ質問や意見が出されました。

本講義を通じて本学とSNU, MUの 大学院生との交流を通じてネットワー クを形成することは, 受講生の将来の キャリア形成においても有益です。来年度はMUにてラーニングサテライト事業として開講予定です。受講生からの評価も高く、来年度も参加したいという希望がありました。今後も継続して講義を提供していく計画です。

(環境健康科学研究教育センター)



集合写真



グループプレゼンテーション

分科会5

Toward Understanding of Changing Environment in East Asia

東アジア域の変わりゆく地球環境の理解に向けて/理学研究院 准教授 佐々木克徳

本分科会では「東アジア域の変わりゆく地球環境の理解に向けて」というテーマで、ソウル大学校地球環境科学部において計15件の研究発表を行い、東アジア域の地球環境問題について、気象学から海洋物理学、海洋化学、海洋生物学までの幅広い分野にわたって熱心な議論が交わされました。

午前はソウル大学校のHanna Na助教による歓迎の挨拶で始まり、本学から3名とソウル大から4名が、各々の研究について口頭発表を行いました。午前と午後のサブセッションの間には、学生主導で分科会独自のソウル大見学ツアーを開催し、交流を深めました。午後には本学から4名、ソウル大から4名が各々の研究について口頭発表を行いました。分科会の最後には本

学の佐々木克徳准教授が、今年度の若 手研究者並びに大学院生の熱心な発 表・討議についての賛辞と、来年度の 北海道大学での分科会の開催と再会を 約束し閉会となりました。

総出席者数は40名程度で、本年度は

韓国極地研究所(KOPRI)からの参加もありました。今後とも研究活動の交流を通じ両校の友好的な関係を維持するように努めていきます。

(理学研究院)



分科会の集合写真

Dentistry in the Aging Society

高齢化社会における歯科(歯学)/歯学研究院長 八若保孝

11月14日(木)にソウル大学校歯学 部にて, 同校歯学部と本学歯学研究院 がカウンターパートとなり,「Dentistry in the Aging Society (高齢化社会に おける歯科(歯学))」をテーマに、分 科会を開催しました。本分科会では, 歯学研究院の渡邊 裕准教授が,

「Oral Frailty Concept (オーラルフ レイルの概念)」をテーマに講演し、 講演後のフリーディスカッションで は、高齢化が急速に進展している中 で、両校が歯科の分野で連携し、どの ように貢献していけるかなどについ て、活発な意見交換がなされました。 分科会終了後には、ソウル大学校歯 学部の施設見学もさせていただき,非 常に有意義な訪問となりました。

なお,全体会の前日にはソウル大学 校歯学部主催の懇親会も開催いただ き、両学部等の親睦を深めるととも に, 今後も, 両学部等の交流を進め,

講演する渡邊准教授

部局間交流協定を締結し、学生の派遣 や共同研究に結びつけていくことで意 見が一致しました。

(歯学研究院)



集合写真

分科会8

The 8th HU-SNU Joint Symposium on Materials Science and Engineering

第8回材料科学工学に関する合同シンポジウム/工学研究院 教授 橋本直幸

本シンポジウムは、ソウル大学校の Myoung-Gyu LEE教授を窓口とし, 11月14日(木)にソウル大学校材料工 学化学棟において開催されました。ソ ウル大と本学双方から計8名の教授・ 准教授、大学院生10数名を加えて、計 20名以上の参加者数となり、先生方か ら材料科学に関する最新の研究の紹介 がありました。特に、本学からは新規 材料あるいは新学術領域に係る研究発 表がなされ、ソウル大学校からは最新 の材料評価技術に関する報告があり, これらに対して活発かつ有意義な討論 が行われました。一部の研究課題につ いては、今後も引き続き情報交換する 予定です。各機関とも共同研究の締結 には積極的であり、実際、参加者の一 部はシンポジウムを通して互いに連絡 を取り合っています。次年度は本学が ホストとなり、第9回合同シンポジウ ムを開催することで合意しました。な お、開催時期及び場所については今後 の調整が必要ですが、初夏にサマース

クールと併せた開催を検討していま す。また、インターンシップによる学 生の交流もこれまでどおり積極的に行

います。

(工学研究院)



参加者集合写真





シンポジウムの議論

分科会9

The Role of Nuclear Engineering toward a Sustainable Future

持続可能な未来への原子力工学の役割/工学研究院 准教授 千葉 豪

本分科会は、原子力工学分野におけ るソウル大学校と本学の情報交換と 交流を目的として、歓迎レセプショ ンの翌日にソウル大学校のNuclear Engineering Departmentの建物にて 行われました。今回で22回目を迎える 合同シンポジウムですが, 原子力工学 分野に関わる分科会が開催されるのは 初めてとなります。韓国、日本とも に、原子力エネルギー利用の見直しが それぞれの国内で議論されています が、大規模エネルギー源として世界 的に大きな役割を果たしてきた原子力 工学技術の重要性は今後も変わりはな く、それぞれの大学では原子力技術の さらなる深化を目指した研究開発が進 められています。本分科会はそれを両 校で共有する良い機会となりました。

ソウル大学校からは4名, 北海道大 学からは3名の教員が参加し、原子力 工学の中の原子炉物理・原子力熱水 力・原子力材料に関する最先端のアク ティビティが紹介されるとともに、学 生セッションでは各校からそれぞれ4 名の学生が研究発表を行いました。朝

密度の濃い分科会でしたが、学内カ 行うことで合意しました。より発展さ フェテリアでの昼食やソウル市内の有 名焼肉店での夕食なども含めて, 大い に親睦を深めることができました。

来年度は本学がシンポジウムのホス

から夕方までぎっちり予定が詰まった トとなりますが、本分科会も継続して せた分科会をホストとして計画してい るところです。

(工学研究院)



集合写真





分科会の風景

各省庁・メディアが選ぶ注目研究2019に、本学から3名の研究者が選出

文部科学省,農林水産省,朝日新聞が発表した2019年に注目された研究において,下記のとおり選出されました。本学基幹ウェブサイト (ホームページ) では、より詳しい記事も掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

(総務企画部広報課)

工学研究院 佐藤太裕教授

文部科学省 科学技術・学術政策研究所 (NISTEP) 「科学技術への顕著な貢献 2019 (ナイスステップな研究者)」

佐藤太裕教授(工学研究院)が、文部科学省科学技術・学術政策研究所(NISTEP)が発表した「科学技術への顕著な貢献2019(ナイスステップな研究者)」に選ばれました。受賞業績は「竹が『軽さ』と『丈夫さ』を併せもつ理由の構造・材料力学的解明」です。佐藤教授の研究成果は科学雑誌Newton(2017年8月)など複数のメディアに取り上げられ、2018年には土木学会論文賞を受賞しています。竹をはじめとした植物がもつデザインを活かした植物形態模倣技術(プラントミメティクス)の確立と、それに基づく軽くて丈夫な新しい材料の開発が期待されています。

♦ https://www.hokudai.ac.jp/news/2020/01/-2019-1.html



サイエンス・カフェ札幌で研究を紹介する佐藤 教授(写真提供:CoSTEP)

獣医学研究院 今内 覚准教授

農林水産省農林水産技術会議「2019年農業技術10大ニュース」

今内 覚准教授(獣医学研究院)の研究成果「牛白血病の新たな制御方法,抗ウイルス効果の確認に成功 – 牛の難治性疾病に対する応用に期待 – 」が、農林水産省農林水産技術会議の「2019年農業技術10大ニュース」に選ばれました。今回の選出を受けて今内准教授は、「牛白血病による被害を食い止めるためにも、新たな制御法の開発が急務です。家畜の創薬は食品となる家畜を対象とするため、実用化に至るまでのハードルが高く、社会実装にはまだかかりそうです。しかし、北海道大学としては諦めず生産者様の生産性向上の願いに資する創薬研究を遂行していきたいと思っています」と語りました。

♦ https://www.hokudai.ac.jp/news/2019/12/-201910.html



動物のための創薬研究に挑む今内准教授

総合博物館 小林快次教授

朝日新聞「2019年10大ニュース」(科学分野)

小林快次教授(総合博物館)の研究成果である,「むかわ竜」の新属新種の解明,そして「カムイサウルス・ジャポニクス」という学名を付けたことが,朝日新聞「2019年10大ニュース」(科学分野)に選ばれました。カムイサウルス・ジャポニクスは,「日本の竜の神」という意味です。北海道のみならず日本が誇る恐竜化石として,世界中にその名が知れ渡ってほしいという小林教授の想いが込められています。カムイサウルスは,2019年7月~10月に国立科学博物館(東京・上野)で開催された「恐竜博2019」の目玉として展示され,来場者数は67万人を突破しました。

♦ https://www.hokudai.ac.jp/news/2019/12/kamuysaurus-japonicus-1.html



カムイサウルスの全身骨格復元模型と小林教授

本学初の南極地域観測隊長、氷と海の関係解明に挑戦

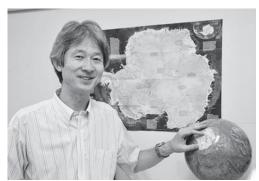
本学から初めて南極地域観測隊長が 誕生しました。低温科学研究所の青木 茂准教授は, 第61次南極地域観測隊の 隊長として,他4名の本学教員・学生 と共に、観測隊に参加しています。第 61次南極地域観測隊の重点テーマの一 つは、南極観測船「しらせ」を活用し た南極の海と氷の観測と, その相互作 用の解明です。青木准教授は南極の海 と気候変動の実態とメカニズムについ て研究していることから、第153回南 極地域観測統合推進本部総会(文部科 学省) の決定を受け、隊長に選ばれま

した。前線で活躍する隊員たちをとり まとめるなど、現場のマネジメントが 求められます。

11月27日 (水), 一行は日本から南 極へと出発しました。本学のウェブサ イトでは、青木准教授をはじめ、とも に観測隊に参加する低温科学研究所の 中山佳洋助教, 小野数也技術専門職 員, ウォンパーン・パット研究員, 環 境科学院博士後期課程の山崎開平氏の 出発直前インタビューを公開していま すので、ぜひご覧ください。

- ・青木茂准教授を隊長とする南極地域 観測隊, 本日出発
- ♦https://www.hokudai.ac.jp/ news/2019/11/post-599.html
- ・北大から南極の海洋観測へ~青木隊 長とともに4名の教職員・学生が トッテン海域に出航~
- ♦https://www.hokudai.ac.jp/ news/2019/12/post-603.html

(総務企画部広報課)



青木准教授



4名の隊員たち 左から小野技術専門職員、中山助教、 ウォンパーン研究員, 山崎氏



南極観測船「しらせ」



出発前の成田空港にて

Academic Fantasista 10月は8名の研究者が札幌市内の高校で講義を実施

平成24年度から実施している「国民との科学・技術対話」推進に関する研究支援事業、通称「Academic Fantasista (ア カデミックファンタジスタ)」では、北海道新聞社の協力のもと、高校生を対象とした講義を行っています。10月は、札幌 北高等学校,札幌南高等学校,北海高等学校の3校で出張講義を実施しました。

(総務企画部広報課)

「夢のエネルギー人工光合成の実現に向けて」

時:令和元年10月16日(水)15:50-17:20

場:北海道札幌北高等学校

■参加生徒: 1.2年生16名

■参加講師:三澤弘明(電子科学研究所 教授)



自身の研究について話す三澤教授



講義後に質問にきた高校生に応対する様子

6名の研究者で高校を訪問

時:令和元年10月24日(木)14:15-16:05 \blacksquare

場:北海道札幌南高等学校 一会

■参加生徒:1年生約300名(1名あたり2講義選択)

■参加講師:正宗 淳(理学研究院教授)「美しい数学がもたらす技術革新」

工藤與亮(医学研究院教授)「MRIでアルツハイマー病の早期診断に挑む」

平田健司 (医学研究院 助教)「AIによる画像診断」

今内 覚 (獣医学研究院 准教授)「動物のがん・感染症に対する新薬の開発」 渡部直樹 (低温科学研究所 教授)「宇宙空間での分子の進化と氷微粒子」

アイツバマイゆふ (環境健康科学研究教育センター 特任講師) 「環境中の化学物質と子どもの健康」

「様々な現象を数学を使って理解してみる」



数学のおもしろさを語る正宗教授



獣医学部の魅力を紹介する今内准教授



MRIの仕組みについて話す工藤教授



宇宙空間を身近なものに例えて説明する渡部教授



エコチル調査や北海道スタディを紹介するアイ ツバマイ特任講師



例題を用いてAIを解説する平田助教

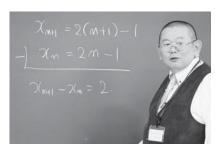
日 時:令和元年10月30日(水)16:40-18:10

■会 場:北海高等学校 ■参加生徒: 1 年生 22名

■参加講師:長山雅晴(電子科学研究所附属社会創造数学研究センター 教授)



渋滞現象を数理モデルであらわすには…?



数列と漸化式について説明する長山教授

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動をすることとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報

基金累計額(12月31日現在)

25.613件 5.009,206,287円

12月のご寄附状況

法人等12社,個人751名の方々から29,872,025円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名 (法人等)

いしだ歯科医院, 一般財団法人協済会, 佐川昭リウマチクリニック, サノフィ株式会社, 寺田医院, テルモ株式会社, 日本新薬株式会社 札幌支店, ニューオータニイン札幌, 北海道大学医学部精神医学教室同門会

寄附者ご芳名(個 人)

	1	1	1	1		1	1
合川 正幸	青木 宏	井口 登	池田 重雄	池田 輝明	石井 哲夫	石村孝太郎	石渡 英夫
井戸川静夫	井原 博	入澤 秀次	岩田 一孝	上江洲安宏	臼井 康裕	内田 綽子	縁記 和也
大浦 洋一	大嶋 卓	大庭 眞治	大原 正範	緒方 清一	奥田 英信	尾崎志津子	尾﨑 孝雄·範子
小田原一史	小内 透	角田 敏男	梶原 達也	金川 眞行	兼平 愛海	神島 保	上條 直樹
河本 充司	岸 克典	工藤 章裕	久保田幸一	河野 一郎	古梶 正洋	小菅 充	小林 一三
小林 景	小松 寿幸	斉藤 久	坂本 大介	佐古 和廣	佐々木亮子	佐藤 明子	佐藤 信彰
佐藤 広文	佐野 公昭	三升畑元基	三分一博基	塩満 正哉	志済 聡子	篠田 好彦	柴田 祐次
渋谷 正人	清水 研一	白尾 誠二	城田 昌良	菅野 和明	杉江 和男	鈴木 聡美	鈴木 誠一
鈴木 貴之	須藤 修方	関口 恭毅	瀬田石瑠枝子	瀬名波栄潤	瀬山 邦明	園田 保男	高田 弘
高野 耕	高橋 直之	髙橋 博幸	竹内 信彦	田中 敬基	田中 雅人	丹野千枝美	津田 栄継
土家 琢磨	土屋 裕	寺澤 睦	照屋 均	戸田 純子	豊田 威信	中井 和裕	永井 典久
長嶋 和郎	中塚 英俊	中野 弘	中町 昭道	中村 俊彦	中村 昌弘	中村 幸雄	成澤 優
成木 嘉美	鳴海 俊之	南部 光宏	西田 実弘	額田 茂実	野村 修一	萩原 寛司	林寺 正俊
原田 祥二	髭 修平	平井 喜郎	平瀬 隆弘	廣瀬 隆之	福田信也	福永 悟郎	藤澤 裕子
星野 謙蔵	細川 里香	本間 昭一	前川 立夫	前田 博	政氏 伸夫	正立 和章	松沢 正宏
松田 健一	松原 謙一	松本栄次郎	松元 和幸	松本 修一	水野 吉広	溝畑 茂治	三谷 千花
三土 京子	皆川 一志	宮﨑 慶之	宮田 信幸	武藏 学	村上 明	村上 幸夫	森 修
森田 亮	八木 美沙	安井 敬一	柳田 康幸	八幡 敬一	山田 和奈	山田 雄三	横井 成尚
横田 浩	横山 考	吉岡 正俊	吉田 直美	吉田 広志	吉田 学	吉原 照彦	脇坂 明美
渡邉 諭	渡邊伸一郎						

銘板の掲示(20万円以上のご寄附)

(法 人)

佐川昭リウマチクリニック、サノフィ株式会社、日本新薬株式会社 札幌支店、北海道大学医学部精神医学教室同門会

(個 人)

池田 重雄, 神島 保, 古梶 正洋, 佐古 和廣, 佐藤 広文, 渋谷 正人, 白尾 誠二, 関口 恭毅, 松本栄次郎, 宮﨑 慶之, 武藏 学, 八幡 敬一, 横田 浩, 吉田 直美

感謝状の贈呈



岩田 正道 様(令和元年12月4日)



横田 篤 様 (令和元年12月12日)



石山 喬 様(令和元年12月16日)



協和キリン株式会社 様(令和元年12月17日)

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスして下さい。https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html

①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書(兼・給与口座からの引落依頼書)」をダウンロードし、ご記入の上、基金事務室に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、基金事務室にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書 (教職員現金用)」をダウンロードしてご記入いただくか、基金事務室にもご用意していますので、基金事務室にお越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室(事務局・学内電話 2017)

(総務企画部広報課)

リスクアセスメント研修を開催

12月4日(水), 本学附属図書館に おいて, リスクアセスメント研修を開 催しました。

本学のリスク評価と対応について は、本学業務方法書第11条において、 定期的かつ継続的なリスク評価の見直 しを行うこととしております。

本研修は,事務局各部課(室)の重 要リスクを選定し、それらの優先度を 可視化・明確化した上で、その対応を 検討する一連のリスクアセスメント手 法を学ぶことを目的として、本学のリ

スク管理・危機管理担当の山﨑淳一郎 産学・地域協働推進機構教授を講師と して開催したものです。

本研修では、各部単位のグループに よるワークショップ形式で、各部にお て、本研修で取り上げたリスクアセス けるリスクトップ10の特定と、それら の対応についてブレインストーミング の手法を活用して熟議しました。

なお, 本研修には, 事務局職員29名 が参加し、アンケートでは全員がリス クアセスメント手法を「理解できた」 または「概ね理解できた」と回答する

結果となりました(資料 アンケート 回答結果参照)。

また、現在、事務局では各部リスク トップ10の可視化・認識を目的とし メント手法を用いたリスク評価の作業 を実施しています。

総務企画部総務課では、引き続きり スクマネジメントに関する取り組みを 実施していく予定です。

(総務企画部総務課)



講義を行う山﨑教授



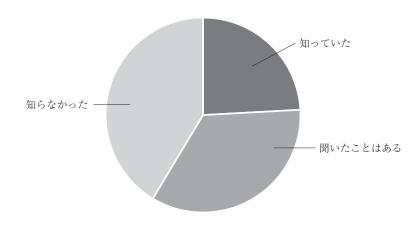


ワークショップの様子

令和元年度リスクアセスメント研修 アンケート 回答集計

I. 国立大学法人北海道大学業務方法書第11条においてリスク評価を行う旨の定めがあることを知っていましたか。

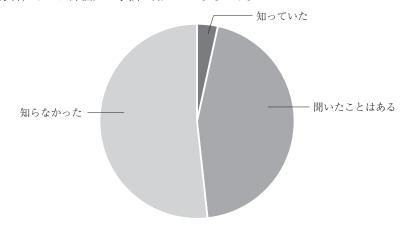
知っていた	7
聞いたことはある	10
知らなかった	12
合計	29



■知っていた ■聞いたことはある ■知らなかった

Ⅱ. リスクアセスメント(リスク特定、リスク分析、リスク評価)の手法は知っていましたか。

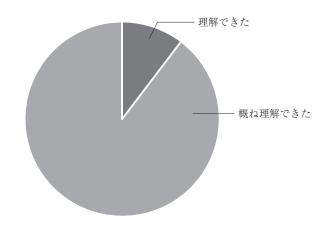
知っていた	1
聞いたことはある	13
知らなかった	15
合計	29



■知っていた ■聞いたことはある ■知らなかった

Ⅲ. 今後、改めて各部(室)単位でのリスク評価(優先順位付け)を予定していますが本研修を通して、リスクアセスメン ト(リスク特定、リスク分析、リスク評価)の手法は理解できましたか。

理解できた	3
概ね理解できた	26
理解できなかった	0
合計	29



■理解できた ■概ね理解できた ■理解できなかった

新渡戸学(フェローゼミ)の全体発表会を開催



来場者全員での記念撮影

新渡戸カレッジの学部教育コースで は、12月7日(土)高等教育推進機構 において,「新渡戸学(フェローゼ ミ)全体発表会」を開催しました。

新渡戸学(フェローゼミ)は、本学 の同窓生等から選抜された新渡戸カ レッジフェローが実施する少人数の演 習形式の科目として2016年度から開講 され、基礎プログラム学部教育コース

の必修科目に位置付けられています。 今年度は、下記8テーマのゼミが開講 され、各ゼミにつき20名程度のカレッ ジ生が受講しました。ゼミの中で学生 は5名程度のチームに分かれ、現地視 察での学びや調査した事柄をもとに. 課題を設定しその解決方法を議論しま す。このフェローゼミには高大連携の 一環として札幌市や近郊の高校生も参

加し、大学生と一緒に活発な議論を交 わしました。

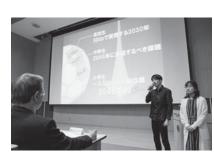
授業の最後には成果発表の場として 全体発表会を実施し、各ゼミから選ば れた8チームによるプレゼンテーショ ンが行われました。審査の結果、選ば れた上位3チーム、及びフェローゼミ 履修生の投票で選ばれた学生大賞の チームは2020年5月16日(土)に実施 予定の入校式・新渡戸Dayで再びプレ ゼンテーションを披露します。

8チームの発表終了後にはオナーズ プログラム生 (新渡戸カレッジ2年目 以上)を対象とした科目やプログラム が紹介され、アドバンストゼミ受講生 による発表及び国際インターンシッ プ, 対話プログラム担当教員による説 明が行われました。

(学務部教育推進課)

2019年度新渡戸学(フェローゼミ)テーマ一覧

- 1. グローバリゼーションの終焉の中での我が国の安全保障(石川裕一フェロー ゼミ)
- 2. 北海道における持続的な健康促進、未来の生き方を考える(大友俊彦フェ
- 3. 2045年のSDGsに向けて~平和ゲームを考える~ (多田幸雄フェローゼミ)
- 4. 日本の刑務所の歴史と現状、課題は何か(玉城英彦フェローゼミ)
- 5. 札幌市におけるインバウンド向けMICE事業を考える(長岡宗男フェローゼ ₹)
- 6. これから札幌市が「もっと住みたい街」になるために(萩野 泉フェローゼ
- 7. スタートアップに取り組んでみよう 自分の未来を拓くことが持続的社会に つながる (廣重勝彦フェローゼミ)
- 8. 歴史・ブランド・ものづくりに立脚した文化と価値創造~サッポロ CLASSICに学ぶ~これから北海道が「もっと住みたい地」になるために(横 井成尚フェローゼミ)



発表の様子

表彰式の様子

全体発表会審査結果

第 1 位:多田幸雄フェローゼミ 第 2 位:玉城英彦フェローゼミ 第 3 位:石川裕一フェローゼミ 学生大賞:萩野 泉フェローゼミ



会場全体の様子

2019年度冬季国際交流会~広がる・つながり、Connecting with others ~を開催



11月28日(木), 北大生協北部食堂 において, 学務部学生支援課主催によ る2019年度冬季国際交流会を開催しま した。

この行事は、留学生及び日本人学生 に国際交流の機会を提供し、本学での 学生同士の繋がりをより強めることを 目的に実施するもので、37の国や地域 の学生から申込みがあり、 当日は新渡 戸カレッジ生を中心としたボランティ ア9名の他、399名の参加がありまし た。

ミシェル・ラフェイ・ケイ総長補佐 の挨拶の後, 同総長補佐, 司会の泉 善貴さん (工学部3年). 伊藤真梨さ ん(文学部2年)による乾杯の発声で 開会しました。

食事担当の学生ボランティアは参加

者が宗教に関わらず料理を食べられる よう事前に北部食堂のスタッフと打ち 合わせを行い, 会場装飾担当の学生ボ ランティアは落書きコーナーとフォト スポットを会場の柱に設け, ステージ に本学口ゴマーク入りのバックパネル を設置したほか、国旗、折り紙、造花 で会場を華やかに飾り付けました。

会の序盤から、北海道大学のジャズ 研究会、合唱団及び交響楽団によるパ フォーマンス披露を行いながら、留学 生に人気のヒューマンビンゴを行いま した。ヒューマンビンゴにおいては、 学生同士で互いに質問し合いながら和 気あいあいと触れ合うことで交流の輪 を広げることができた様子でした。 ゲーム終了後は、ビンゴ用紙を用いて 抽選会を行い、賞品の当選者を決定し



ラフェイ総長補佐による開会挨拶

ました。番号が発表されるたびに会場 では大きな歓声が上がり, 賞品を受け 取った学生は嬉しそうな笑顔を見せて いました。

学生達はお互いに連絡先の交換や写 真撮影をする等. 本学での新しい友人 づくりを楽しんでいる様子でした。

この交流会は日本人や外国人留学生 から公募した学生ボランティアが企 画・運営をしており、交流会終了後の 反省会では次回の交流会に向けての改 善点や対策等, 前向きな意見が寄せら れました。

次回は春季の実施を予定しており, 学生の運営ボランティアや多くの参加 者が集まることを期待しています。

(学務部学生支援課)



交流する参加者の様子



くじに当たり景品を受け取る参加者

大学の世界展開力強化事業合同連携会議・ラウンドテーブル 「サステイナビリティを探求する大学院教育とは何か」を開催

12月4日(水)に、工学部・フロンティア応用科学研究棟において、大学の世界展開力強化事業合同連携会議ラウンドテーブル「サステイナビリティを探求する大学院教育とは何か」を開催しました。

本ラウンドテーブルは、国際的に活躍できる人材の育成と大学教育の国際化を目指し、本学が海外協定校と協働で実施する4つの国際教育プログラム「大学の世界展開力強化事業*」の緩やかな統合の可能性や事業間の連携を模索するため、大学院国際教育プログラムの今後の役割、サステイナビリティを探求する大学院における人材育成について意見交換を行うために開催したものです。当日は、60名を超える学内外の関係者が参加しました。

第1部(講演)として,まず始めに,長谷川晃理事・副学長から開会の 挨拶及び本学における大学院教育の総 括的課題について講演があり,本学の 大学院改革の状況について及びサステイナビリティ教育における本学の大学の世界展開力強化事業の役割や今後の方向性について説明がありました。

続いて、国連大学サステイナビリティ高等研究所(UNU-IAS)の山口しのぶ所長から、「持続可能な開発目標の促進における大学の役割」をテーマに、国連大学における大学院教育の取組について基調講演がありました。基調講演では、大学院の講座やカリキュラム等の高等教育にサステイナビリティを組み込むことを目指し、多様な取組が紹介されました。北海道大学が長年参加している、UNU-IASの重要なイニシアティブ、アジア太平洋地域の高等教育機関のネットワーク(ProSPER.NET)についても言及されました。

第1部の最後に、本学で実施されている4つの「大学の世界展開力強化事業」について、各事業に携わる代表教

員によるプログラム内容及び実施状況 等の紹介があり、これまでの実績や成 果、課題、そして今後の展開等の共有 がなされました。

第2部(ラウンドテーブル)として、4事業の関係者を中心に円卓討議があり、基礎科目の共通化等、今後の4事業間の緩やかな連携の可能性や、新たなファンディングの検討、教員研修の重要性等、様々な側面について、活発な議論がなされました。また、本学もメンバーである大学コンソーシアムProSPER.NET(アジア太平洋環境大学院ネットワーク)との連携も模索しつつ、今後も「サステイナビリティ」をテーマとして各事業の強みを活かしながら互いに連携を強化し、更なる事業の発展に努めていく予定です。

(学務部国際交流課)

**本学における4つの国際教育プログラム「大学の世界展開力強化事業」(文部科学省・国際化拠点整備事業)は以下のとおり。

交流推進型:タイプA

- ・平成24年度採択 人口・活動・資源・環境の負の連環を転換させるフロンティア人材育 成プログラム (PAREプログラム、対象国:インドネシア・タイ)
- ・平成25年度採択 日本とタイの獣医学教育連携:アジアの健全な発展のために (CVEプログラム,対象国:タイ)
- ・平成26年度採択 極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する専門家育成プログラム (RJE3プログラム, 対象国:ロシア)
- ・平成29年度採択 持続可能な輸送システムと社会インフラ構築のための国際共同研究力 育成プログラム (STSIプログラム, 対象国:インド)



長谷川理事・副学長による開会挨拶



国連大学サステイナビリティ高等研究所 山口所長による基調講演



講演を熱心に聴く参加者



ラウンドテーブルの様子

第2回ICReDD国際シンポジウムを開催



シンポジウム参加者の集合写真

文部科学省国際研究拠点形成促進事業費補助金「世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)」により2018年10月に本学に設置された化学反応創成研究拠点(ICReDD/アイクレッド)では、11月27日(水)から29日(金)の3日間の日程で、第2回国際シンポジウムを開催しました。

本シンポジウムは、「Toward Interdisciplinary Research Guided by Theory and Calculation」(理論と計算に先導される融合研究を目指して)をテーマに、海外からの招待講演者8名に加えて、若手研究者によるポスターセッションを行うなど、充実した内容となりました。参加者は前回の130名を大きく上回る190名余りとなり、合成化学、光化学、計算化学、情報科学など、国内外の様々な分野の研究者や学生が一堂に会し、「計算科学がどのように実験を先導できるか」について活発な議論が展開されました。

初日の開会にあたり、西井準治理事・副学長、巽 和行WPIプログラムオフィサー (PO) から挨拶があり、その後、ICReDD拠点長の前田 理教授が拠点の概要説明を行いました。続いて、テキサス大学(アメリカ)の

Vladimir Gevorgyan教授、トロント大学(カナダ)のAndrei Yudin教授、韓国科学技術院(韓国)のMuHyun Baik教授、ICReDD主任研究者の瀧川一学特任准教授(兼・理化学研究所研究員)らが講演を行いました。1日目の講演終了後にはレセプションが行われ、講演者らを囲んで親交を深めるとともに、共同研究や今後のICReDDの展開についての議論も行われました。

2日目は、立教大学の山中正浩教授、ストックホルム大学(スウェーデン)のFahmi Himo教授、ICReDD主任研究者の長谷川靖哉教授、北京大学(中国)のJianbo Wang教授、エモリー大学(アメリカ)のDjamaladdin G. Musaev教授らが講演を行うとともに、ポスターセッションでは、25名の若手

研究者による発表があり、シンポジウム参加者と活発な議論が行われました。

最終日には、ストラスブール大学 (フランス)のLuisa De Cola教授、 ICReDD主任研究者の澤村正也教授、 ピッツバーグ大学(アメリカ)の Peng Liu准教授らが講演し、最後に前 田拠点長が講演者と参加者への感謝と 挨拶を述べ、シンポジウムは盛会裏に 終了しました。

なお本シンポジウム 2 日目には、前田拠点長が開発した "Artificial Force Induced Reaction (AFIR)" 法についてのMANABIYAワークショップが開催され、複数の企業の方にも参加いただきました。AFIR法は、研究者が新しい反応経路を発見する助けとなる重要な手法で、ICReDDにおける基幹技術です。AFIR法を活用することにより、今後新規反応開発の飛躍的加速が期待されています。

ICReDDでは今後もこのような国際 シンポジウムを毎年開催し、ICReDD における研究を世界へ発信するととも に、様々な分野の研究者との融合研究 を展開していきます。

(化学反応創成研究拠点 (ICReDD))



ポスターセッションの様子





西井理事・副学長



異プログラムオフィサー



前田ICReDD拠点長

「北海道大学新技術説明会」を開催



新技術説明会の様子

国立研究開発法人科学技術振興機構 と本学産学・地域協働推進機構は、令 和元年11月21日(木)にJST東京別館 ホール (東京・市ヶ谷) において、特 許庁, 関東経済産業局と共に「北海道 大学説明会」を開催しました。

本説明会は,本学が主催者となり, 本学の材料・ライフサイエンス系の特 許技術シーズを集め、研究者が自らの

特許技術について実用化を展望した技 術説明を行うことで、事業化および共 同研究を希望する企業等と産学連携 マッチングを図るイベントです。本学 では、平成22年度から平成30年までは 北海道地区の他大学・高専・公設試等 と連携して開催しておりましたが、今 回から単独開催となりました。今回は 1日で8件の講演発表がなされ、来場

者数136名,技術個別相談件数13件, 名刺交換数82件と例年通りの盛況のう ちに終了しました。今回引き合いを受 けた企業様に継続的なフォローを行 い、今後の技術移転活動に反映させて まいります。

(産学·地域協働推進機構)



工学研究院:幅崎浩樹教授



化学反応創成研究拠点(ICReDD): 北川裕一特任講師



工学研究院:林 重成准教授



農学研究院: 増田 税教授



理学研究院:原田 潤准教授



薬学研究院:前仲勝実教授



薬学研究院:高倉栄男講師



薬学研究院:田所高志特任助教

「北海道大学起業家育成基金」を創設



北海道新聞社の独占取材を受ける株式会社セラフ土屋会長(左),西井準治理事(中央),金子副機構長(右)

産学・地域恊働推進機構は、12月2日(月)、アントレプレナー教育を一層充実させるため、「北大フロンティア基金」の一つとして新たに「北海道大学起業家育成基金」を創設しました。設立発起人は、金子純一副機構長のほか、本学OBであり、若手アントレプレナーの育成と支援を積極的に行っているITサービス業 株式会社セラフ(東京)の土屋 努会長など、7名から成ります。

同日, 札幌市内で開かれた設立発起 人会では、3千万円を目標額として寄 附を集め、学内の起業家教育プログラムの経費に充てることや産学官の連携を強化していくことを確認しました。 また、設立発起人会開催後、北海道新聞社による独占取材を受けました。

本学は、2017年度に文部科学省「次世代アントレプレナー育成事業(EDGENEXT)」で採択されたプログラム(主幹機関:東北大学)に、協働機関として参画しております。プログラム実施の中で、フィンランド発祥の企業課題解決プログラム「DEMOLA」を日本で初めて導入するほか、世界最大規模

の起業コンテストであるHult Prize (2019年)では、本学の学生チームが日本の大学として初めて国際予選で優勝するという快挙を成し遂げており、今後も継続して起業家精神を持つ人材を育成するべく、本基金の創設にいたりました。

本基金で得た資金は、アントレプレナー教育の充実を図り、北大発ベンチャー支援のために使用します。今後、札幌市や北海道経済連合会などと連携のうえ、産業界を中心として広く資金を集める予定です。

本基金の創設を契機に、アントレプレナーに係る学生プロジェクト・大学発ベンチャー設立等スタートアップへの支援など、様々な支援を行い、北大発ベンチャーを増加させ、イノベーションを創出することが期待されます。

(研究推進部産学連携課)

産学連携推進本部 本間特任教授が「国際認定・技術移転プロフェッショナル: RTTP」に認定

産学・地域協働推進機構産学連携推 進本部の本間 第 特任教授が「国際 認定・技術移転プロフェッショナル: RTTP(Registered Technology Transfer Professional)」に認定され ました。

RTTPは、技術移転プロフェッショナル国際連盟(The Alliance of Technology Transfer Professionals: ATTP)が、大学や産業界、政府機関研究所などに勤務する知識移転及び商業化の実務者に向けた国際的な専門家の基準であり、世界では約400人認定されております。日本人では18人目、道内では初の認定者になります。

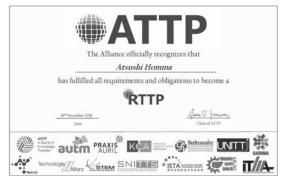
RTTPの認定により、技術移転のプロフェッショナルであることが世界的に認められ、今後、海外における特許ライセンス交渉が有利になり、国際共

同研究や特許ライセンス契約のさらな る増加が期待されます。

(研究推進部産学連携課)



本間特任教授



RTTP認定証

国際連携研究教育局(GI-CoRE)ビッグデータ・サイバーセキュリティグローバルステーション (GSB)が「ビッグデータ・サイバーセキュリティ・IoTに関する国際シンポジウム を開催



講演者とシンポジウム関係者

12月5日(木)・6日(金)の2日 間, GI-CoREビッグデータ・サイバー セキュリティグローバルステーション (GSB) 主催によるビッグデータ・サ イバーセキュリティとIoTに関する国 際シンポジウムを, 本学情報科学研究 院・知識メディアラボラトリー (VBL) 棟で開催しました。夏季に 続き今年度2回目となる今回の冬季シ ンポジウムでは、海外大学から4名、 本学情報科学研究院から3名の教員に よる基調・招待講演と、学生による ショートプレゼンテーション及びポス ターセッションで構成され、国内外か ら2日間で延べ54名の参加がありまし た。

初日には、GSBの連携大学の一つである、シドニー工科大学(オーストラリア)のEryk Dutkiewicz教授、及びチュラロンコン大学(タイ)のSupavadee Aramvith准教授、Prasit Prapinmongkolkarn名誉教授から、そ

れぞれ IoT実証実験、ビデオIoT. Digital Economy に関する講演が行わ れ, 2日目には, 本学情報科学研究院 の廣瀬善大准教授,長田直樹准教授よ り、情報幾何とバイオインフォマティ クスに関する講演,午後にはシドニー 工科大学のXiaojing Huang教授と本学 情報科学研究院の山本 学准教授によ る無線通信,アンテナ技術に関する講 演が行われました。また、両日を通し て行われた学生によるポスターセッ ションでは、GSBのリサーチ・アシス タント (RA) (博士後期課程) 9名に 加え、本学GSB参画教員が指導教員と なっている,修士課程を含む有志 4 名 の大学院生が発表を行いました。

GSBでは、国際連携研究及び教育の両面から、若手研究者支援にも力を入れており、GSB-RAには今後の研究活動を見据え、様々な発表形式での経験を重ねてもらうという趣旨のもと、前回の夏季シンポジウムとは違うプログ



会場の様子



ポスターセッションにおいてDutkiewicz教授から質問を受けるGSB-RA学生

ラム構成を組みました。

教員による講演と学生のポスターセッションを交互に挟む形で開催した今回のシンポジウムでは、セッションが進行するに連れ、参加者同士がより近い距離間で交流を持つことができ、教員及び学生による研究分野の枠を越えた活発な意見交換が行われ、大変有意義なシンポジウムとなりました。

(国際連携研究教育局)

ベトナム社会主義共和国ハノイ市にてASEANハノイオフィス開所式及び北海道大学交流デー等のイベントを開催

2019年7月にベトナム国家大学ハノイ校科学大学内にASEANハノイオフィスを開設したことにより、同大学にてオフィス開所式を開催した他、北海道大学交流デー、ベトナム北部同窓会設立記念会合、及び北海道大学アンバサダー委嘱式を開催しました。

(国際部国際連携課・総務企画部広報課)

北海道大学交流デー(ベトナム国家大学ハノイ校科学大学)及びASEANハノイオフィス開所式を開催



開所式での集合写真

本学では、第3期中期計画やスーパーグローバル大学創成支援事業構想調書において、多くの外国人留学生が見込まれるASEAN地域との交流の推進を掲げており、2019年7月にベトナム国家大学ハノイ校科学大学内に、同大学と本学との共同オフィスとしてASEANハノイオフィスを開設しました。ベトナム国家大学ハノイ校は、政府に直属し、ベトナムに2つある国家大学のうちのひとつで、同大学傘下の科学大学と本学は、2013年3月に大学間交流協定を締結しています。

共同研究及び学生交流をさらに促進するため、ベトナム国家大学ハノイ校科学大学において、12月6日(金)にベトナムで初めての北海道大学交流デーを開催し、共同オフィスの開所式を行いました。本学からは、笠原正典総長職務代理、国際連携機構の川野辺創副機構長・教授、網塚 浩理学院長をはじめ、理学研究院、先端生命科学研究院、工学研究院、地球環境科学研究院の教員等計18名が参加しました。

当日は、午前に共同オフィス前での除幕及び、開所式を行いました。ベトナム国家大学ハノイ校科学大学のグエンティエンザン(NGUYEN Tien Giang)副学長と笠原総長職務代理の挨拶があった後、在ベトナム日本国大使館の麻妻信一次席公使からお言葉をいただきました。その後、両大学の紹介と、日本学生支援機構(JASSO)ベトナム事務所の萩原隆史所長から日本留学の概要について説明がありました。 開所式には、両大学の関係者のほか、本学アンバサダーのレヴィエットズン(LE Viet Dung)氏や同窓生、学生など約50名が出席しまし、



ベトナム国家大学ハノイ校科学大学



共同オフィス(右から麻妻次席公使,ザン副学長,笠原総長職務代理,ズン本学アンバサダー,川野辺副機構長)

午後からは数学・機械学・情報科学, 物理学, 化学, 生物学, 地質学, 環境科学, 気象学・水文学・海洋学のグループに分かれ, 研究交流や意見交換, 研究プログラムの紹介などを行いました。同大学の学生が積極的に質問する様子も見られました。

今後も国際連携機構では、オフィスを活用して、ベトナムのほかASEAN地域全体との教育・研究機関等との連携拡大、教員や学生の相互交流の促進、卒業生ネットワークの構築を行い、幅広い面での交流を強化していくほか、優秀な留学生を本学へ受け入れる活動を展開していきます。



研究交流の様子

北海道大学アンバサダー(ベトナム)委嘱状交付式および北海道大学ベトナム北部同窓会設立記念会合を開催

12月6日(金), ベトナム・ハノイ において、ベトナム北海道大学アンバ サダー、レヴィエットズン(LE Viet Dung) 氏に対して、委嘱状の交付を 行いました。

ズン氏は、本学のベトナム人留学生 の草分けとして、1993~1999年本学農 学研究科にて修士/博士号を取得しま した。従前勤務していたカントー大学 に復職後、農学部長などの要職を歴任 し、現在は副学長(国際関係・研究・ 質管理担当)を務めています。JICA の技術協力プロジェクトのみならず ファースト・ステップ・プログラム生 の受入れ等, 本学との連携に篤く協力 いただく他, ベトナム日本留学生同窓 会副会長及びカントー市ベトナム日本 親交協会会長を務めるなど、留学生 OBとして同窓会活動に積極的に参加 しています。

委嘱式は、同日開催の北海道大学交 流デー(ベトナム国家大学ハノイ校科 学大学) への参加者をはじめ, 萩原隆 史JASSOベトナム事務所長、工藤拓 也在ベトナム日本国大使館二等書記官 (本学同窓生), ベトナム人同窓生, 幾島章仁北海道大学アンバサダー(ハ

ノイエルム会長),及び寺本二憲北海 道大学パートナー(同会長代理)らが 見守る中、温かな雰囲気で執り行わ れ、笠原正典総長職務代理から委嘱状 が授与されました。ズン氏は、「私は 北海道大学のことをHokkaido Universityと呼んだことはありませ ん。今までずっと親愛を込めて"北 大"と呼んできました」と始めた受嘱 スピーチで、自らの人生がいかに"北 大"で得た知識・経験・知己に支えら れているかについて深い感謝の念を語 り、今後ベトナム南部同窓会の設立に 世話役として尽力したい. との展望で 結びました。

一方, 同日行われた「北海道大学べ トナム北部同窓会設立記念会合」には 8名の本学ベトナム人同窓生が参集し 幹部の選出等が行われ,「ベトナム北 部同窓会」の設立が承認されました。 川野辺創国際連携機構副機構長の挨拶 と本学の最新情報についての発表で幕 を開けた会合は、オブザーバーとして 参加いただいたズン北海道大学アンバ サダーとの懇談も交えて終始和やかに 進行しました。会長にはディン タン ム ン氏 (Dr. DINH Thanh Mung, ベトナ

ム農業・地方開発省, 水資源局, 科学 技術・国際協力部職員). 副会長にはグ エン マン クオン氏 (Dr. NGUYEN MANH Cuong, DNP Water社, ラボ ラトリーマネジャー), 幹事にはヴー チー キム チー氏 (Ms. VU THI Kim Chi、長崎大学熱帯医学研究所ベトナ ム拠点、リサーチアシスタント)が選 出されました。

委嘱式に続いて、ムン ベトナム北 部同窓会会長による乾杯の音頭で始 まったレセプションでは、同日開催の 催事に参加者した全てのベトナム人と 日本人の間で活発な交流が行われまし た。

今般のベトナム・ハノイにおける共 同オフィス開所とベトナム北部同窓会 の設立に加え、新北海道大学アンバサ ダーの委嘱によるベトナム南部同窓会 設立へより一層の弾みがつくなど. べ トナムを含むASEAN諸国における学 術・同窓生ネットワークの強化並びに 各種交流及び留学生リクルーティング の活性化が今後ますます期待されま

(総務企画部広報課)



ベトナム北部同窓会設立記念会合



北海道大学アンバサダー委嘱式等総合レセプション



ズン北海道大学アンバサダーと笠原総長職務代理



受嘱スピーチをするズン北海道大学アンバサダー



懇談を楽しむベトナム人同窓生, 本学教職員お よび寺本北海道大学パートナー(左端)



ハノイエルム会の皆さん(左より幾島北海道大学アンバ サダー、上月 浩Hoya Glass Disk Vietnamゼネラル マネージャー、工藤ベトナム日本国大使館二等書記官)

ガーナ共和国の首都アクラで「日本留学フェア」を開催

本学アフリカルサカオフィスは、11月9日(土)にガーナ共和国の首都アクラにおいて、在ガーナ日本国大使館との共催で「日本留学フェア」を開催しました。本フェアは、サブサハラ・アフリカ地域の優秀な学生の日本留学誘致を目的に、本学が文部科学省から受託している「日本留学海外拠点連携推進事業」の一環として実施したものです。ガーナでの開催は2017年2月に続き2回目となります。

1957年にサブサハラ・アフリカで最初に独立を達成したガーナは、他のアフリカ諸国と比較すると、歴史的に留学を通して発展した国といえます。金やカカオの輸出が好調であったため、英領植民地の中でも裕福な部類に属し、独立以前から欧米の大学へ留学し学位を取得するガーナ人が相当数いたといわれています。初代大統領クワメ・エンクルマを含む当時のガーナ独立運動の活動家たちは、欧米へ留学した者たちであり、帰国留学生が国の成り立ちに密接に関わりました。

現在においても、欧米に多くのガーナ人が留学するなか、日本への留学熱は高いものの、日本への国別留学生数は100名程度に留まっています。そのため、本フェアを通じ、より多くの優秀なガーナ人学生の日本留学実現に向けて、日本とガーナの大学間交流を深めることが必要となります。

本フェアでは、日本留学に関する情報提供と相談受付をおこなう「留学フェア」とサイドイベントとして日本とガーナの大学および研究者間の関係を活性化する「学術交流ワークショップ」が開催されました。参加機関とし

て, 本学のほか, 京都精華大学, 筑波 大学, 東京医科歯科大学, 長崎大学, 山梨大学, 山梨学院大学の7大学, そ して在ガーナ日本国大使館, JICA ガーナ事務所が出席しました。本学か らはアフリカルサカオフィス所長の奥 村正裕獣医学研究院教授, 高井哲彦経 済学研究院准教授, 大竹 翼工学研究 院准教授、留学コーディネーターの日 下部光特任准教授, 大門 碧特任助教 と山本ひとみ特定専門職員, 国際部の 村瀬達哉国際協力マネージャーと安高 由香利特定専門職員が参加し、日本の 関係諸機関からの出席者は22名でし た。留学フェアおよび学術交流ワーク ショップの両イベントとも、ガーナ大 学に隣接するエラタホテルを会場に開 催しました。

学術交流ワークショップでは、ガー ナ全土から37名の大学教職員が集い、 日本人と合わせて計56名が参加しまし た。姫野 勉駐ガーナ日本国特命全権 大使による開会挨拶の後、ガーナ大学 の副学長エベネザ・オドゥロ・オウス 教授(日本で学位取得)の挨拶と, 奥 村アフリカルサカオフィス所長による 本事業の説明がありました(写真1)。 その後、日本学術振興会(JSPS)ナイ ロビ研究連絡センターおよびJICA ガーナ事務所が、各機関の研究助成制 度について紹介しました。 さらに、本 学の高井准教授(写真2)をはじめ ガーナ大学の教員が研究発表を行いま した。ガーナ大学の教員7名(全員が 日本で学位取得)の各発表は、日本の 研究機関との共同研究, また「トヨタ 自動車」や「味の素」といった日系企 業との産学連携による研究など多岐に

わたり,ガーナと日本の間で多様な研 究協力が進んでいることが明らかにな りました。

留学フェアは、計242名の参加がありました(写真3)。留学希望者の内訳は学部生が多く、高校生16名、学部生154名、修士課程学生21名、博士課程学生1名、その他は社会人等でした。本フェアでは、セミナーと日本からの参加大学の紹介や個別相談を行うブース会場を別にし、さらに参加者を2グループに分け、参加者が効率的に情報収集できるようにしました。

セミナーでは, 日本留学と国費奨学 金プログラムの概要説明、ガーナ人元 留学生による日本留学体験談. ガーナ での日本語教育の活動紹介に加え, 高 知大学からガーナ大学へ留学中の吉村 湧喜氏が日本の大学の学生生活を話し ました。一方, ブース会場では, 本学 含む日本の参加大学から研究教育の特 色と留学プログラムが紹介され(写真 4), それに加えて資料参加23大学* のパンフレットの配布とともに留学 コーディネーターによる留学全般に関 する相談対応 (写真5), ガーナ人元 留学生による個別相談のブースを設置 し、参加者のニーズに沿ったフェアの 運営に努めました。



写真1:奥村アフリカルサカオフィス所長による本事業の説明



写真2:学術ワークショップで発表を行う高井准教授



写真3: 留学フェアの参加者とセミナー会場



写真4: ブースで本学紹介および留学相談に応じる大竹准教授と高井准教授

本フェアへの参加に際し、オンライ ンの事前登録と同時に、アンケートへ の回答を参加条件にしました。それに より、参加者の属性とニーズを事前に 把握でき、フェア終了後もメール等で 追加情報の配信が可能となりました。 アンケート結果によると, 本フェアに 関する情報の入手先の約7割が FacebookやWhatsApp等のSNSによる 友人間の情報共有に基づくものでし た。また広報開始後1週間以内に,事 前登録数がフェア参加予定定員の250 名に達しました。スマートフォンの普 及とともに、アフリカにおける効果的 な広報ツールとして、SNSやWebサイ ト活用の重要性を改めて認識しまし

た。本学アフリカルサカオフィスは, ニーズに沿った質の高いサービスを提 供し、日本留学を通して日本とアフリ カの架け橋となる人材を発掘するよう に努めていきます。

**岡山大学,お茶の水女子大学,金沢大学, 北見工業大学, 九州大学, 九州工業大学, 京都大学, 工学院大学, 神戸情報大学院大 学, 国際大学, 東京工業大学, 東京国際大学, 鳥取大学, 富山大学, 名古屋大学, 名古屋 工業大学, 兵庫県立大学, 広島大学, 宮崎 大学, 山形大学, 横浜国立大学, 立命館大学, 早稲田大学(以上, 計23大学)



写真5: 留学全般への相談に対応する山本ひとみ 留学コーディネーター

ヘルシンキにて日本学術振興会フィンランド同窓会10周年・日本フィンランド国交樹立100周年記念セミナーを開催



集合写真

12月12日(木), ヘルシンキのフィンランド・アカデミーにて, 本学欧州 ヘルシンキオフィスと日本学術振興会 フィンランド同窓会の共催で「日本学 術振興会フィンランド国交樹立100周年・日本フィンランド国交樹立100周年記 念セミナー」を開催しました。本学からは, 欧州ヘルシンキオフィス田畑伸一郎所長(スラブ・ユーラシア研究センター教授)と岡部赳大同オフィス副 所長が参加しました。

午前の部では、「日本学術振興会フィンランド同窓会10周年記念式典」が行われ、村田 隆在フィンランド日本国特命全権大使と家 泰弘日本学術振興会理事、津本忠治日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター長、田畑欧州ヘルシンキオフィス所長、フィンランド・アカデミーのヘイッキ・マンニラ理事長による祝辞がありました。祝辞に続き、日本学術振興会フィンランド同窓会初代会長のマッツ・ロース博士と前会長を務められたクリスティーナ・ヨキネン博士により、同窓会の歴史が紹介されました。

午後の部では、「日本・フィンランド国交樹立100周年記念セミナー」が行われ、日本・フィンランド100周年親善大使を務める照明デザイナーの石井幹子氏からのビデオ・メッセージ、同じく照明デザイナーである石井アカリ・リーサ氏による特別講演(パリからのスカイプ中継)の後、二国間の共

同研究に長年携わっている 4 名の研究 者による講演が行われました。本学からは田畑所長が講演を行い、北極域研究を通じた本学とフィンランドの研究 者・学術機関との共同研究、日本の北極域研究の展開と現状を紹介しました。出席者からは、北極域をめぐる中国・韓国との競合関係や、シベリアの住民の気候変動への反応などについて質問が出され、活発な意見交換が行われました。この他にも、アールト大学のマーリット・カルッピネン教授から、超電導研究分野での東京工業大学との長年の研究協力について紹介があ りました。 東京の産業技術総合研究 所臨海副都心センターでAIとロボットを研究するヨキネン博士は、社会 的・哲学的観点も交えつつ、現在進め ているプロジェクトの紹介をされまし た。フィンランド気象学研究所にシニ ア研究員として勤務されている鶴田青 希博士は、衛星による温室効果ガスの 観測についてのフィンランド気象学研 究所と日本との共同研究について発表 されました。

セミナーは午前・午後の部合わせて 70人ほどの出席者を集め、本学のパートナーを務めるヘルシンキ大学の リーッカ・ランシサルミ博士、東フィンランド大学のユッシ・ライネ准教授 も出席し、本学と日本学術振興会を中心とした関係者で大変にぎわいました

翌日には若宮健嗣外務副大臣を迎え ての大使館主催のレセプションが行わ れ、日本・フィンランド国交樹立100 年の記念の年が成功裏に締めくくられ たことが祝われました。



村田大使の祝辞



田畑所長による祝辞



家理事の祝辞



田畑所長の講演

日本留学海外拠点連携推進事業主催 日本留学フェア(於ロシア連邦・ウラジオストク)を開催

文部科学省の委託事業「日本留学海 外拠点連携推進事業」の一環として. 11月30日(土), ウラジオストク市内 にある極東連邦大学付属科学図書館に おいて本学の協定校である極東連邦大 学の協力を得て日本留学フェアを開催 しました。今回のフェアは2月に実施 したハバロフスクでの日本留学フェア に続き、ロシア連邦極東地域において 2回目の開催になります。

ウラジオストクは、東方経済フォー ラムをはじめ, 多くの国際会議の開催 地であり、2018年12月には極東連邦管 区の州都となっています。また、貿易 都市として発展を遂げ、多くの日系企 業も進出するなど日本との関係が深 く. 日本への留学の関心も高い地域で す。

留学フェアでは、まず全体会が行わ れ,フェアの開会にあたり,本学ロシ

アモスクワオフィス所長である加藤博 文アイヌ・先住民研究センター教授. 極東連邦大学Danil Scherban副学長補 佐, 在ウラジオストク日本国総領事館 豊島総一郎首席領事から挨拶がありま した。次に、国際部国際連携課ハタエ ワ・タチアナ特定専門職員から日本へ の留学についての概要説明がありまし た。その後, 在ウラジオストク日本国 総領事館櫻木雄介副領事から, 日本の 国費留学制度の概要について説明が行 われました。続いて、ロシア人学生か ら日本留学体験談が発表された後, 現 地参加機関によるプレゼンテーション が行われました。

全体会の終了後, 個別相談会を実施 しました。個別相談会では. 現地参加 機関ごとのブースを設置し、参加者か らの相談に対応したほか, 資料提供 コーナーを設置し、ロシア・CIS(独

立国家共同体) 地域の留学生向けの日 本の各大学紹介パンフレット及び各大 学の英語プログラム紹介リーフレット を配布しました。

今回のフェアには、 極東連邦大学の 学生を中心に現地の大学生のほか, 高 校生、保護者など約40名の参加があり ました。また、日本からは、本学、京 都大学, 東京大学, 新潟大学, 立命館 アジア太平洋大学の5大学と、MANABI 外語学院の参加がありました。

本学では、引き続き、ロシアの教育 機関, 行政, 支援機関や企業等と連携 し、日本とロシア・CIS地域の学術・ 学生交流を促進する活動を実施してい く予定です。



豊島総一郎首席領事の挨拶



個人相談会の様子



参加機関のブース

在日豪大使館コート大使、クーパー公使の表敬訪問及び グリーン在札豪領事への北海道大学アンバサダー委嘱状交付式を開催

12月17日 (火), 在日豪州大使館の リチャード・コート大使. ブレット・ クーパー公使(兼豪州貿易促進庁北東 アジア担当ジェネラル・マネー ジャー)、在札幌豪州領事館のロナル ド・グリーン領事(兼豪州貿易促進庁 貿易官) の笠原正典総長職務代理への 表敬訪問に合わせて, グリーン領事へ の北海道大学アンバサダー委嘱状交付 式を開催しました。

グリーン領事と北海道の関わりは古 く. 北見柏陽高等学校への留学経験 や, ご父君である豪タスマニア大学地 質学者・豪国立大学名誉教授のディ ヴィッド・グリーン博士が、本学総合 博物館の客員教授として共同研究を 行っていたことに端を発します。その 後は、本学聴講生として日本語能力試 験1級を取得し、日豪の経済連携に20

年以上関わった後、在札幌豪州領事館 領事に着任していました。領事とし て, 本学と, メルボルン大学, シド ニー大学,シドニー工科大学,カー ティン大学といった豪州大学との共同 研究・教育連携や、産学研究連携の支 援を幅広く行っており、今般の委嘱式 には、国際連携研究教育局 (GI-CoRE) 人獣共通感染症グローバルステーショ ンの新開大史准教授, 同関屋俊輝助 教. 食水土資源グローバルステーショ ン長の井上 京教授, ビックデータ・ サイバーセキュリティグローバルス テーション長の宮永喜一教授, 同吉岡 真治教授, 工学研究院の五十嵐敏文教 授らが参列しました。

グリーン領事からは、北海道大学ア ンバサダーの打診があった折、ご父君 に相談したところ後押しされたこと,

初めてのオセアニア地域からの北海道 大学アンバサダーとして、長きにわた る縁を活用していきたいことが語られ ました。列席のコート大使からは, IT. 健康、農学、先住民研究等の分 野で、北大と豪大学の活発な連携が起 きていることは喜ばしく, 特に西豪鉱 業プロジェクトや豪サイバーセキュリ ティにおける協力を期待したいとの表 明がありました。クーパー公使から は、今和元年内で在札幌豪州領事館を 閉館しても、豪州にとって北海道が重 要な連携相手であることに変わりはな く, 今後は公使が教育等の項目を立て ての連携を日本国内機関に対して行っ ていくと伝えられました。

(総務企画部広報課, 国際連携機構)



歓談風景



アンバサダー委嘱を受けたグリーン領事



参加者集合写真

中学生対象「AIとデータサイエンスを知って親しむ講義×体感イベント」開催

人材育成本部女性研究者支援室と数理・データサイエンス教育研究センターは公益財団法人KDDI財団と共催で、12月21日(土)、情報科学研究院において、中学生対象の「AIとデータサイエンスを知って親しむ講義×体感イベント2019『未来を創り出すデータサイエンスに触れてみよう』第2弾」を実施しました。本企画は今年度よりKDDI財団の「青少年啓発・育成活動助成」により実施しています。

7月に開催された1回目に定員の6倍を超える参加希望があったため、落選した生徒を対象に参加を募り、52名が当選しました。

はじめに大学院情報科学研究院の長谷山美紀教授の「画像処理で広がる未来~わくわくする未来につながる最先端研究~」と題した講義がありました。画像処理やAIによって変わっていくこれから先の未来を少しだけ覗き見た中学生たちは目をキラキラさせていました。

続いてKDDI株式会社北海道総支社の毛利直子氏からは「高速で大容量の通信システム『5G』で実現する世界」と題し、これまでの通信システムの歩みから最先端の技術がどのように使われているのか、また今後どのよう

に使われていくのかという興味深いお 話しをいただきました。

午後は、情報科学研究院の小川貴弘 准教授の「自分たちで組み立てたパソコンでAIを動かしてみよう!」という講義と実習を行いました。実習は、パソコン内部を見たり、開発中のアプリを体験したりという魅力的な内容で、時間がいくらあっても足りないようでした。その後、中学生は「データサイエンス研究の現場探検と最先端の情報技術を体験」として、情報科学研究院の研究室見学や最先端の研究機器の体験をしました。

また、保護者を対象として「未来の職業が生まれる?~2030年に必要とされるスキルを考える~」と題し、長谷山教授から講演を行いました。AIによってできることが増える一方で、こ

の先何が必要で何がなくなっていくの かといった話しに、保護者の皆様は真 剣な表情で聞き入っていました。

前回の落選者からは、再開催を希望する声が多く、社会の関心の高さがうかがえました。また参加者アンケートの結果も、今回も非常に好評だったことから、今後も内容を進化させつつも継続的に事業を実施したいと思います。

女性研究者支援室では、女子を中心 とした中高生に対し、様々な理系進路 選択支援の取組を行っています。その 他女性研究者支援室の活動について は、こちらのウェブサイトをご覧くだ さい。

♦ https://freshu.synfoster.hokudai.ac.jp/



実習でPCの内部を観察する様子



最先端の研究を体験する様子

小中高生向け科学体験イベント 「さっぽろサイエンスフェスタ in 北大 」を開催

人材育成本部女性研究者支援室は, 12月21日(土)に学術交流会館にて、 小中学生向け科学体験イベント「さっ ぽろサイエンスフェスタ in 北大」を 開催しました。このイベントは2012年 から開催しており、今回で8回目とな ります。本イベントは地域の子どもや 保護者に大学の研究や科学の楽しさや 幅広さに触れてもらうとともに、学生 や研究者のアウトリーチ活動の場の一 つとして. 地域で科学イベント等を実 施するNPO法人butukuraと共催で企 画・運営を行っています。実際に研究 を行っている学生や研究者による、来 場者のレベルに合わせた科学的説明が

ブース名

特徴のイベントです。小学4年生以上 の小中高生を対象として事前申込制で 参加者を募りました。

今回のイベントでは学内9部局から 参加した大学院生を中心とした学生や 教員等の有志47名が10ブース, 北見工 業大学が1ブース, 札幌市内や滝川 市、苫小牧市の高校等の科学部が5 ブース,企業が2ブース,NPOが1 ブースを出展しました。

それぞれのブースでは、出展者達が 行っている研究等に関して参加者が楽 しく体験できるよう工夫されており, また高校生のブースは簡単な科学工作 や体験が中心となっていて、どちらも

出展グループ名

小学生から大人まで非常に興味深そう に体験していました。

本年度の来場者数は子ども503名, 大人411名で、来場者数としては学術 交流会館のキャパシティの限界となっ ていますが、非常に需要が高い内容の イベントであることから、今後もより 良い実施形態を模索しながら継続して いきたいと思います。

(人材育成本部)



医学研究院細胞生理学教室のブース



環境科学院山田研究室のブース



寄生蟲ラボ(北大・旭川医大合同チーム)のブース



農学部分子酵素学研究室のブース

もっと気軽にミクロの世界を見てみよう 医学研究院 細胞生理学教室 【見て食べて触って】糖質の正体を知る! 農学部 分子酵素学研究室 光る色が変わる!?不思議な溶液を作ってみよう! 環境科学院 山田研究室 光はどうやって色が付く?光の色を作ってみよう! 環境科学院 山田研究室 ヒグマってどんな動物? 北大ヒグマ研究グループ 小さな化学実験室〜紙チップを使った健康診断 工学研究院 生物計測化学研究室 理学部 ソフト&ウェットマター研 スライム作りに挑戦しよう! 金属のふしぎ 工学部 材料科学専攻 ふしぎ体験♪光をあてると色がかわる!? 理学部 有機化学第一研究室 寄生蟲ラボ(北大・旭川医大合同 海にくらすふしぎな寄生虫たちを観察しよう チーム) ホタテの貝殻で水をきれいにする 北見工業大学 生物無機化学研究室 光で分類して見る冬の星座 札幌開成中等教育学校 天文班 クイズ! 名探偵ハリーと海辺のなぞ 藤女子中学校・高等学校 科学部 藤サファリパークへようこそ 藤女子中学校・高等学校 科学部 ドラミングキッツキを作ろう 北海道滝川高等学校 科学部 紫外線の強さを調べよう 苫小牧高専 サイエンス部 のび~る、みえ~る?不思議なテレビ 日東電工株式会社 株式会社アミノアップ 研究部 生物 野菜のチカラを科学する 化学研究室 金属樹を育てよう NPO法人butukura

博士人材と企業の情報交換会 第41回「赤い糸会&緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicでは、11月29 日(金)に学術交流会館にて、本年度 第3回(通算第41回)「赤い糸会&緑 の会」を開催しました。

本年度第3回目の開催となる本会 は、企業には博士人材の高い専門性や 総合力を理解いただき,博士人材には 企業の研究開発活動や企業における博 士人材の活躍状況等を知ってもらうこ とで、相互理解を深め、視野の複線 化、活躍フィールドの拡大を図ること を目的としています。

今回で通算41回目の開催となる「赤 い糸会&緑の会」は、参加者も回を重 ねるにつれ増加し、博士人材は10部局 41名,企業からは17社42名,オブザー バ大学から2校6名が参加しました。 また、平成26年度末より採択された科 学技術人材育成のコンソーシアムの構 築事業により,連携大学から博士人材 1名(東北大学1名)も参加しまし

た。

本会では、冒頭の人材育成副本部長 の伴戸久徳農学研究院教授による開会 挨拶、赤い糸会担当の吉原拓也特任教 授による趣旨説明の後、企業から業界 動向や博士人材の活躍状況等の紹介が 行われ, その後, 博士人材の自己紹介 ポスター発表. 企業ブースを訪問して の個別情報交換等が活発に行なわれま

開催後、企業からは、「一度に色々 な分野の研究者と知り合うことが出 来, 有意義な時間でした。又, 自身の 仕事の励みにもなりました」「ポス ター発表は非専門家に対して分かり易 く説明するトレーニングがしっかりな されていて感心した。また学生が話す 機会が多く良いプログラムであると感 じた」との声をいただきました。また 参加した博士人材からは、「HPではわ からない、新規事業内容や募集状況な

どを教えていただき, 就職に非常に有 利であった」「企業の人との接点を作 るという点では、とてもうまく機能し ていると思う」といった嬉しい声も聞 かれました。

人材育成本部では上記の活動のほか、 企業事業所視察, Advanced COSA, J-window (個別キャリア相談), キャ リアパス多様化支援セミナー、キャリ アマネジメントセミナー,企業での長 期インターンシップや. コンソーシア ムの連携大学である東北大学や名古屋 大学等が運営するプログラムの活用な どによって, 博士人材の実践力を高め ております。今後ともご理解とご協力 をよろしくお願い申し上げます。

なお. 興味のある方は人材育成本部 のホームページを是非ご覧ください。

♦ http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp



伴戸副本部長の開会挨拶



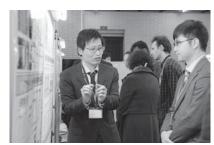
吉原特任教授の趣旨説明



企業からの業界動向説明



説明に聞き入る博士人材



博士人材のポスター発表



企業との個別情報交換

外国人博士人材と企業の情報交換会 CAREER LINK MEETUP (英語版赤い糸会) を開催

人材育成本部I-HoPは, 12月10日 (火) にフロンティア応用科学研究棟 にて、外国人DC・PDと国内企業の英 語による情報交換会「CAREER LINK MEETUP -For international DC and PDs-」を初めて開催しました。

当日は, ソニー株式会社をはじめ国 内企業7社19名,外国人DC·PDは 「連携型博士研究人材総合育成システ ム」による連携大学からの参加者を含 む24名が参加しました(沖縄科学技術 大学院大学6名, 兵庫県立大学1名)。

伴戸久徳人材育成本部副本部長の挨 拶に始まり、企業のショートトーク、 外国人DC・PDによる自己の研究内容 やスキルのポスター発表、企業のブー スセッション,情報交換交流会と,全 編英語による密度の高い交流が行われ ました。

終了後、参加した外国人DC・PDか らは「英語で開催されたことがとても よかった」「日本企業についての知識 が深められた」「予想以上に充実した 時間だった」等の高い評価が寄せら れ、今後のインターンシップ等の可能 性が見えてきた参加者もいました。ま た,参加企業からも継続開催を期待す るコメントが複数寄せられました。

DC・PDと企業の交流会は、14年の 歴史をもつ本学の「赤い糸会」をはじ め全国各大学で実施されており、その 多くは外国人の参加も可能となってい ますが、いずれも日本語でのコミュニ ケーションを想定したものであるた め、日本語があまり堪能でない外国人 が参加した場合の企業担当者との交流 機会やマッチングの可能性は. 極めて 限定的となっています。

「Hokkaidoユニバーサルキャンパ ス・イニシアチブ」構想のもと、「世 界の課題解決に貢献する北海道大学」 を目指して、国際大学院の拡充など学 内の国際化を進めている本学では、多 くの外国人DC・PDが日々研究に励ん でいます。また、人材育成本部で毎年 行っている. 外国人大学院学生及びポ ストドクターを対象としたキャリア志 向調査では、毎年40%以上が「日本で の滞在」を希望すると回答していま す。I-HoPでは、これらの人材と、採 用にあたって「応募時点で日本語力を 要求しない日本企業」との英語による

交流の機会を設けることは双方にとっ て有益かつ極めて重要と考え, このイ ベントを企画しました。

I-HoPでは、これまで体系的に構築 してきた主に日本人博士人材のキャリ ア構築支援プラットフォームを, 外国 人博士人材も意識したグローバルな支 援体制の機能を拡張し、外国人DC・ PDの日本でのキャリアパスを広げる ため、日本語の習得支援と、日本企業 とのマッチング機会の創出に向けて 様々な取り組みを行っています。本イ ベントには、スケジュールの都合によ り今回参加が叶わなかった企業も複数 あり、また連携他大学からの注目も高 く, 今後の継続開催が期待され, ひい ては外国人留学生の日本国内での就職 率向上に寄与することが期待されま



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換

博士課程学生の海外企業訪問 USA Site Visit in RTPを開催

人材育成本部I-HoPは、12月1日 (日)~12月7日(土)に博士課程学 生の海外企業訪問「USA Site Visit in RTP」を実施し、アメリカ合衆国ノー スカロライナのResearch Triangle Park (RTP) の4社3大学を訪問しまし た。当初は10月の実施を予定していま したが、台風19号の影響によりやむな く延期されたもので、参加者にとって 待ちに待った渡米となりました。

今回の訪米では,「連携型博士研究 人材総合育成システム | の連携大学の ひとつである名古屋大学の米国技術移 転事務所,Technology Partnership of Nagoya University, Inc. (NU Tech) の協力のもと、4名の博士学生がRed Hat, BASF, IBM, Syngentaの4社 と. ノースカロライナ州立大学. デューク大学, ノースカロライナ大学 チャペルヒル校の3大学を訪問しまし た。各企業では担当者から事業や職場 に関する説明を受けた後、施設の見学 や、それぞれの参加者が研究内容を英 語でプレゼンテーションし、企業の研 究者と, 博士のキャリアに関するディ スカッションも行いました。

最終日にはNU Techにて振り返り

のミーティングを行い、今回の参加で 学んだこと, それを帰国後どのように 生かしていくかについて,「日本のコ ミュニティーへ本プログラムで得た感 覚を還元したい」「企業へ就職する目 標が明確になった。それに向けてスキ ルを更に磨く」等、それぞれの参加者 が決意を述べました。

I-HoPの活動は、これまで体系的に 構築してきた主に日本人博士人材の キャリア構築支援プラットフォーム を. 外国人博士人材及び外国企業も意 識したグローバルな支援体制に拡張 し、本学の国際的な人材育成機関とし ての機能を整備・充実させるもので す。日本人・外国人博士人材のキャリ アパスを広げるため、2018年度から海

外サイトビジットを実施しています。 海外の情報もインターネットで瞬時に 手に入る時代ですが、 実際にアメリカ の研究・職場環境を体感したことで, 参加者からは「将来の渡米に向け、イ メージが湧いてきた」「日米間の違い を肌で感じた」「今後自分がしなけれ ばならない事が明確になった」「博士 取得後の進路について、アカデミアし か考えていなかったが、視野が広がっ た」等の感想が聞かれ、今後の研究や 学生生活を送るうえでの強い刺激を受 けたことがうかがえました。参加者の 今後のさらなる活躍が期待されます。



BASF訪問



企業でのプレゼンテーションの様子

工学研究院及びサステイナブルキャンパスマネジメント本部の取組が 「サステイナブルキャンパス賞2019 | を受賞

工学研究院建築都市空間デザイン部 門及びサステイナブルキャンパスマネ ジメント本部 (SCM本部) の取組が、 サステイナブルキャンパス推進協議会 (CAS-Net JAPAN) が主催する「サ ステイナブルキャンパス賞2019 | を受 賞しました。

「サステイナブルキャンパス賞」 は、サステイナブルキャンパス構築に 係る優れた取組事例を表彰制度によっ て顕彰するもので、2015年の創設以来 毎年実施されています。第5回となる 今回は〈建築・設備部門〉〈大学運 営・地域連携部門〉〈学生活動部門〉 の3つの部門に該当する具体事例が募 集され、本学の取組「学生と大学がと もに考える将来計画 | が〈大学運営・ 地域連携部門〉にて受賞しました。

受賞した取組は、SCM本部の教職 協働のキャンパスマネジメント体制を 生かし、工学研究院建築都市空間デザ イン部門教員が同本部及び施設部の協 力のもと、キャンパスの将来計画を検 討するプログラムを工学院の教育カリ キュラム「計画・設計特別演習I」の 中で実施するものです。本演習で取り 組む課題は本学キャンパスが抱える問 題の解決を前提とし、キャンパスマス タープランで検討項目とされたプロ ジェクトを設定, 実践的教育と運営面 の強化を両立する内容としておりま す。



表彰式

なお. 上記取組のプログラム詳細は SCM本部のウェブページに掲載して おりますので、ぜひご覧ください。

♦https://www.osc.hokudai.ac.jp/ topic/6899

(サステイナブルキャンパスマネジメント本部)



受賞者プレゼンテーション



受賞者 集合写真

令和元年度第2回サステイナブルキャンパス推進員会議を開催

サステイナブルキャンパスマネジメ ント本部は、12月10日(火)、学術交 流会館において令和元年度第2回サス テイナブルキャンパス推進員会議を開 催しました。各部局のサステイナブル キャンパス推進員及び同補佐のほか, 施設部職員等合わせて54名の出席があ りました。

本会議では、皆川一志本部長の挨拶 の後, 令和元年度夏季の節電結果, 冬 季の節電対策、インフラ長寿命化(個 別施設計画), 令和3年度概算要求

(施設整備費補助金事業), ごみの分 別ポスターの活用及びサステイナブル キャンパス評価システム (ASSC) に よる平成30年度評価報告について説明

がありました。

(サステイナブルキャンパスマネジメント本部)





会議の様子

■部局ニュース

公共政策大学院が金融庁グローバル金融連携センター研究員との 交流会を実施

11月7日(木), 公共政策大学院 (公共政策学教育部 · 公共政策学連携 研究部)では、金融庁グローバル金融 連携センター (GLOPAC) との協力 により, 同センター研究員と本学院の 交流会を実施しました。GLOPACで は、毎年、海外の金融規制・監督担当 者(保険,銀行,金融機関等)を研究 員として招聘し、2~3カ月の研修・ 研究プログラムの提供を行っていま

す。今回はそのフェローシッププログ ラウィ, カンボジア, モンゴル, ミャ ンマー,南アフリカ,ボツワナ,ベト ナム,タイ,サウジアラビアから10名 の研究員が北海道を訪れ、本学では特 別講義と学生たちとのグループワーク による交流を行いました。

当日は、まず本学院の池 直美講師 が本学と学院の紹介及び「日本におけ

る移民の現状」についての講義を行 ラムの一環として、インドネシア、マ い、後半は3班に分かれて「各国にお ける移民の現状と課題」というテーマ でグループワークを行いました。 GLOPAC研究員, 学生はともに熱心 に各国の状況を伝えあい, 差別の問 題、社会保障の問題など、共通課題に ついて議論を深めました。

(公共政策学教育部,公共政策学連携研究部)



グループワークの様子



池講師による講義



GLOPAC研究員集合写真

経済学部・経済学院インターナショナル・サポート・デスク(ISD) 説明会を開催

12月9日(月),経済学研究院にお いて経済学部・経済学院インターナ ショナル・サポート・デスク(ISD) 説明会を開催しました。インターナ ショナル・サポート・デスク(ISD) とは、留学生に対するこれまでのサ ポート体制(1対1のバディプログラ ム)である『チューター制度』をより 発展させたものです。今年度からISD 専用の部屋を設け、週2回(午後)開 設することで、留学生相談(論文添 削・書き方、日本語文法、プレゼン テーションの方法など)をより丁寧に 行うことを目的として, 通年で設置し ました。

今回の説明会は、経済学部・経済学 院の国際交流委員会(髙井哲彦委員 長)の初の企画として、主に留学生に この取り組みを知ってもらうほか、利 用する側からの意見を得ることで、今 後、より利用者のニーズに合ったサー ビスを提供することを目的に実施しま した。

当日は, 本研究院 松尾 睦教授 (国際交流委員会委員)を講師とし て. 今回の主要なテーマとも言える 「留学生のための論文校正サービス」 について、留学生やISDサポーターへ 説明を行いました。留学生を含め教職 員・学生の計29名が参加し、参加者間

でのグループワークやISDサポーター 等との質疑応答など活発な意見交換を 行いました。

今後、ISDサポーターの人員確保や 留学生からの要望への対応など、多く の取り組むべき課題があることを認識 しましたが、リソースが少ない本部局 でも国際交流を標榜する本学への取り 組みに少しでも貢献できるよう, 可能 な限り工夫して進めていきたいと考え ています。

(経済学研究院・経済学部・経済学院)



松尾教授による概要説明



グループワークで質問案を討議する参加者



留学生からの質問に応じる松尾教授

生命科学院がアクティブラーニング形式の「Research Ethics Workshop for IGP students (研究倫理ワークショップ)」を開催



参加者集合写真

12月4日(水),一昨年,昨年に引 き続き4回目の「Research Ethics Workshop for IGP students (研究倫理 ワークショップ) | を開催しました。 このワークショップは, 本学学務部教 育推進課とオープンエデュケーション センターの協力のもと, 国費外国人留 学生の優先配置を行う特別プログラム として生命科学院が実施する「次世代 の生命科学グローバルイノベーター養 成プログラムInternational Graduate Program, Training Program for Global Innovators in Life Science (IGP-GILS)」が、プログラム学生を 対象として実施しました。また, 先端 生命科学研究院・相沢智康教授が講師 を務めました。

受講登録をした学生は、事前に大学 院準備教育プログラム用のe-learning systemを利用して, 広島大学の眞嶋 俊造准教授による「研究倫理」講義を 動画視聴し、事前学習により得た知識 を活用しながら, 与えられた研究倫理 に関する課題に取り組むという反転学 習形式でのアクティブラーニングを行 いました。講義は全編英語で実施さ れ、中国・インド・インドネシア・マ レーシア・エジプト・バングラデ シュ・スペイン・フィリピンからの外 国人留学生15名, 日本人学生1名が3 つのグループに分かれることで、活発 にディスカッションが行われました。 普段接する機会の少ない様々な研究室 の学生が共学することで、知識や考え



相沢教授による講義の様子



グループディスカッションの様子

方を共有するだけでなく, 意見を述べ る姿勢についても、それぞれの学生が 良い刺激を受けたことと思います。

開催にあたりご理解・ご協力いただ いた指導教員の皆様、ご支援いただい た事務担当スタッフの皆様には深く感 謝申し上げます。

(生命科学院)

生命科学院が「第7回生命科学国際シンポジウム」を開催

11月1日(金), 学術交流会館で "The 7th International Life-Science Symposium (第7回生命科学国際シ ンポジウム)"を開催しました。本シ ンポジウムは、国費外国人留学生の優 先配置を行う特別プログラムとして生 命科学院が実施する「次世代の生命科 学グローバルイノベーター養成プログ ラムInternational Graduate Program, Training Program for Global Innovators in Life Science (IGP-GILS) | & Collaborative Research and Education (GI-CoRE) が共催する国 際シンポジウムで, 生命科学院の学生 を中心に企画・運営を行いました。

昨年度と同様に本年度も, 留学生を 含む若手研究者が自らの研究をトップ レベルに発展させる場として、世界で 通用するコミュニケーション・プレゼ ンテーションスキルの向上と, 若手研 究者同士の交流を目的に開催しまし た。留学生63名を含む120名が参加 し, 口頭発表及びポスター発表を通し て、活発な意見交換が行われました。 招待講演では, 京都大学白眉セン

ターの宮崎牧人特定准教授をお招き し, 無細胞系における細胞骨格の形成 機構及び細胞骨格が司る細胞機能の制 御機構について、講演いただきまし た。また、ご自身の豊富な経験を踏ま えて、若手研究者が今後、科学者とし て国際的に活躍するための助言をいた だきました。

シンポジウム終了後は、本年度10月 入学のIGP-GLLS留学生26名の歓迎会 と,優秀口頭発表賞の授賞式を兼ねた 懇親会を中央食堂で行いました。本年 度は、16名の発表者の中からHao Guさ ん, Mahmoud AbuBakr Ahmed Younisさん, Nour Md Mofiz Uddin Khan さん, 石坂優人さんの4名に優秀口頭 発表賞が贈られました。

本シンポジウムは、北大という世界 中から若手研究者が集まる環境におい て活発な討論を行うことにより, 若手 研究者が将来的に国際的な場で活躍す るための一助となりました。

開催にあたりご指導・ご協力をいた だいた先生方、ご支援をいただいた事 務担当者の方々、準備・運営にご協力 いただいた留学生/学生の方々に深く 感謝申し上げます。

(生命科学院)



ポスター発表の様子



京都大学 宮崎特定准教授による講演

「第15回北海道大学-南京大学ジョイントシンポジウム-NIMS」を開催



ジョイントシンポジウム参加者による集合写真

南京大学化学化工学院(中国)と は, 平成17年3月に理学研究科(当 時)と部局間交流協定を締結すること で研究者及び学生の交流を深め、特に 先端化学に関するジョイントシンポジ ウムを毎年交互に開催することで連携 を強化してきました。平成22年から は、総合化学院を中心に本学のみなら ず物質・材料研究機構(NIMS)をは じめ外部組織とも連携し、その交流を さらに拡大しました。平成27年には、 ダブル・ディグリー・プログラムを締 結しました。江蘇省の中核を成す南京 大学は、周辺の大学や研究機関と強力 なネットワークを有しており、ジョイ ントシンポジウムの共同開催も行って います。今回は、11月25日(月)に南 京大学にてシンポジウムを開催し、翌 26日 (火) には場所を淮安市にある南 京大学先端技術研究所に移し, さらに

サテライトシンポジウムを開催しました。

ジョイントシンポジウムは、南京大学側からは中国科学院の院士でもある Hong-Yuan Chen教授、今回の北大側チェアで総合化学院担当の武田 定教授の開催の挨拶と、各大学の代表者から各組織のアクティビティ概況の紹介で始まりました。武田教授、南京大学化学工学院のHuangxian Ju教授による基調講演や、化学の幅広い分野からの17件の講演があり、活発な議論が交わされました。

今回は、本学の博士課程リーディングプログラム「物質科学フロンティアを開拓するAmbitiousリーダー育成プログラム(ALP)」の海外サマーキャンプも実施されました。本学の学生7名と南京大側の学生8名が協力してワークショップを開催し、研究発表、

討論,交流事業などを通して,緊密な連携によって交流を深めました。将来的に活用できる人脈が形成され,さらに同世代の海外学生の研究やレベルを知ることで,自身の研究を進める上での大いなる刺激となったようです。

本事業の開催により、今後も分子化学、物質化学、生物化学などの総合化学分野に拡大する両大学の更なる教育・研究交流の発展が期待されます。 次回(第16回)のシンポジウムは、本学において開催することを約束し、盛況裏に終了しました。

(総合化学院·ALP·理学研究院化学部門)



南京大学Chen教授から本学武田教授へ贈られた 記念品の書



基調講演を行う武田教授



学生主体の交流事業の集合写真

先端生命科学研究院の研究グループが、報道関係者向け研究成果発表会を実施 ~アルツハイマー病発症予防にこんにゃくセラミドが有効であることを発見~

先端生命科学研究院産業創出部門の 湯山耕平特任准教授, 五十嵐靖之招聘 客員教授らの研究グループは, 植物性 (こんにゃく芋由来)のセラミドが、 アルツハイマー病の発症原因の一つで あるアミロイド β ペプチド ($A\beta$) の 脳内蓄積を軽減させることを発見し, 12月19日 (木), 日本橋ライフサイエ ンスビルにて,報道関係者へ向け,研 究成果発表会を実施しました。

発表会では門出健次教授. 湯山特任 准教授、五十嵐招聘客員教授らから本 研究の説明・プレゼンテーションを行 い,30名近くの報道関係者が参加し,

本研究成果への注目度の高さが伺えま した。

本研究で明らかになった植物性セラ ミドのAβ関連病理軽減作用は、アル ツハイマー病予防目的の機能性食品素



研究成果発表会の様子

材開発や創薬に繋がる可能性が期待さ れています。

(先端生命科学研究院)



プレゼンテーションを行う湯山特任准教授

歯学研究院で「動物供養祭」を挙行

歯学研究院では、11月29日(金)、 大会議室において,動物供養祭を執り 行いました。供養祭は、過去1年間に 歯学教育・研究のため実験に供された 動物 (ラット, マウス計1,501体) へ の感謝と追悼のために毎年実施してお

り, 教職員, 学生等の動物実験関係者 約30人が参列しました。

供養祭では、最初に八若保孝歯学研 究院長から挨拶があり,次いで動物実 験委員会委員長の舩橋 誠教授から. 歯学研究の進歩に尊い命を捧げて下

さった多数の実験動物の御霊の安らか なることを願う旨の「祭文(さいも ん)」が捧げられ、最後に参列者全員 により献花が行われました。

(歯学院・歯学研究院・歯学部)



参列者に挨拶する八若研究院長



「祭文」を読み上げる舩橋委員長



献花を行う八若研究院長

令和元年度 薬学部成績優秀賞授与式を挙行

薬学部では、12月13日(金)に本学 部会議室において、令和元年度北海道 大学薬学部成績優秀賞授与式を行いま した。

この賞は「GPA制度の導入に伴い, 学業が優秀な学生を顕彰し, 学生の向 学心を喚起する」ことを目的として, 平成17年度以降に入学した学部3年次 生を対象として設けられたもので、今回で13回目の授与式となります。

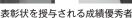
今年度は、学部専門科目の成績が特に優秀な3名が受賞者に選ばれました。

授与式では、薬学部教員が見守るなか、佐藤美洋学部長から表彰状と記念 品が1人ひとりに授与されました(1 名欠席)。今後この賞が本学部学生の 向学心をより一層喚起するものとなる ことを期待しています。

(薬学研究院・薬学部)









成績優秀者と佐藤学部長(中央)

第2回東アジアイノベーション促進フォーラム(East Asia Innovation Accelerator Forum)を開催

11月20日(水)、北京科技大学(中国)において、「第2回東アジアイノベーション促進フォーラム(East Asia Innovation Accelerator Forum)」を開催しました。本フォーラムは、これまでの二者間の交流・連携を発展させ、東アジアの大学が主導する「東アジアによる、東アジアのための東アジア大学ネットワーク」を構築するとともに、世界をリードする研究開発及び社会還元を推進し、材料から付加価値の高い最終製品まで一気通貫で行う体

制を作り上げる新たなイノベーションを東アジアから発信することを目的としています。第2回目の今回は、日本及び中国の4大学から30名以上の教職員及び学生が参加して行われ、本学からも泉 典洋工学研究院副研究院長をはじめとする教職員及び学生8名が参加しました。

本フォーラムでは、Qingguo XUE 北京科技大学副学長の開会挨拶に続い て、河合秀樹室蘭工業大学副学長、泉 工学研究院副研究院長及び沈 振江金 沢大学理工研究域地球社会基盤学系教 授が挨拶を行いました。

引き続き、学生のポスターセッション及び教員による分科会が行われました。分科会では、コンピューター工学と物質科学工学の2分野に分かれて11の発表が行われ、イノベーション促進のための活発な議論が交わされました。次回のフォーラムは本学において開催する予定です。

(工学研究院)



開会の挨拶をする泉工学研究院副研究院長



各大学代表者の集合写真



分科会の様子

工学系部局で「第2回こころの健康セミナー」を開催

工学研究院,情報科学研究院,量子 集積エレクトロニクス研究センターでは,年2回「こころの健康セミナー」 を開催しています。

12月10日(火),工学研究院において,工学系部局なんでも相談室カウンセラーである石原一人氏(合同会社メンタルアシスト北海道・職業カウンセラー)による,本年度第2回目の「こころの健康セミナー」を開催しました。

本セミナーでは「依存ってなんだろう?」と題して、アルコールや薬物への依存に加え、昨今よく知られるよう

になってきたギャンブルや買い物, ゲーム等への依存など様々な依存について解説が行われ,参加した16名の学 生及び教職員はその認識及び理解を深めました。

終了後のアンケートでは、「依存について知るきっかけになった」、「依存症は脳の病気であることが分かった」、「ハームリダクション(被害の減少)というアプローチがあることを知った」、「こころの健康について関心が深まった」等の感想が多く寄せられました。

工学系部局では、今後も「こころの

健康セミナー」を開催する予定です。

(工学研究院,情報科学研究院, 量子集積エレクトロニクス研究センター)



セミナー風景

北海道大学病院で「第61回ふれあいコンサート クリスマスのタベ」を開催

北海道大学病院では12月11日 (水), 「第61回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を開催しました。毎年, 患者サービス推進委員会が中心となって色々な企画をしており, 今年も会場の病院アメニティホールには, 電飾が施された高さ3mの特大クリスマスツリーや空気で膨らませたエアサンタが飾られ, 見慣れた風景が華やかに彩られました。

秋田弘俊病院長の挨拶で開会し、続いて札幌ジュニアジャズスクールによるジャズ演奏と、本院臨床研修センターの川村拓也医師(ヴァイオリン)と永沼絵里香氏(ピアノ)による合奏が披露されました。定番のクリスマスソングが演奏される中、会場全体で「きよしこの夜」を合唱するなど、会場にはクリスマスの雰囲気が満ちあふれました。

開会前には参加者へのプレゼント配付が、演奏の合間には北海道日本ハムファイターズ選手のサイン入り色紙等

を景品としたお楽しみ抽選会が行われ,多くの患者さんたちに笑顔の輪が 広がりました。

コンサートは髙橋久美子看護部長の 挨拶で幕を閉じました。職員らによる



開会の挨拶をする秋田病院長



川村医師と永沼氏による合奏

手作りのクリスマスコンサートは, 訪れた人々の心に温かな思い出を残したことでしょう。

(北海道大学病院)



札幌ジュニアジャズスクールによるジャズ演奏



髙橋看護部長による閉会の挨拶

環境科学院でインターナショナルパーティを開催

環境科学院では、11月29日(金)にインターナショナルパーティを開催しました。世界28カ国から170名の留学生が集う本学院では、国際交流の1つとして毎年11月にこのパーティを開催し、日本を含む各国の学生が各々出身国の料理やパフォーマンスを披露して交流を深めています。

今年出された料理は、ロシアチーム からは日本でも馴染み深いボルシチの 他、ブリヌイという料理で、クレープ のようなシートに蜂蜜やジャムをつけ て提供されました。インドチームから

はチョレマサラというひよこ豆のスープカレー、隣のバングラディシュチームからはマトンカレー、また、インドネシアチームからはグライ・アヤムという香辛料の効いた鶏料理が提供され、その一帯は香ばしい匂いがしていました。日本チームからはちらし寿司と炊き込みご飯で、アレルギーやハラルに関する掲示もされ、細やかな気遣いがみえました。その他、韓国、中国、アルジェリアチームからも料理が提供され、用意された料理はどれも美味しそうで、並ぶ列も絶えず、大盛況

でした。1時間ほどたち参加者のお腹 も満たされた頃、多言語でのギターの 弾き語りや歌の披露、最後には優美な バレエの披露があり、参加者はパ フォーマンスを楽しんでいました。

学生の他, 教員も多く参加するこの パーティは, 料理を通して, また, 文 化的な理解を深める上でも, 毎年良い 交流の場となっています。

(環境科学院)



ロシアチームのボルシチとブリヌイ



日本チームはちらし寿司と炊き込みご飯



大盛況でした

新専攻設置記念公開シンポジウム 「観光とメディアの融合が開く新たな可能性」を開催

メディア・コミュニケーション研究院、国際広報メディア・観光学院、観光学高等研究センターは、2019年4月に「国際広報メディア・観光学専攻」が新たな専攻として学院に設置されたのを記念し、12月7日(土)に学術交流会館において、公開シンポジウム「観光とメディアの融合が開く新たな可能性」を開催しました。

現学院の前身である,2000年に創設された国際広報メディア研究科の時代を含め,これまでメディア・コミュニケーション分野における専門人材の育成に取り組んできた国際広報メディア・観光学院は、今年3月でちょうど満20年を迎えます。2007年の組織改組(学院設置)によって、従来の「国際広報メディア専攻」に「観光創造専攻」を加えた2専攻となり、地域主体

の観光振興を主眼とした教育研究を2 本目の柱として据えてきました。その ような歴史を歩んできた本学院は、こ れまでに蓄積してきた人材育成の実績 を踏まえつつ、今後のミッションとし て、コミュニケーション環境の激変と 人や情報の流動性のさらなる高まりと いう状況を深く理解し、これからの社 会で活躍するために必要な融合的資質 を備えた専門人材を育成することを目 指して、2019年4月に2つの専攻を一 元化した「国際広報メディア・観光学 専攻」を立ち上げ、これまで以上に機 動的で柔軟な協働にもとづいた教育研 究の実現を目指すこととしました。そ うした協働の土台を支えるのは、全学 の協力のもとに可能となった文理融合 であり, また学外諸組織との連携によ る産官学融合です。この公開シンポジ

ウムは、こうした新専攻の設置主旨と 協働の意義を確認しつつ、一般市民を 含めた関係者に広くそれを周知するこ とを目的として開催したものです。

新専攻の設置主旨を分かりやすく示すことを意図して、シンポジウムのテーマを「観光とメディアの融合」と定めて実施しました。また、産官学の協働を具体的な形で示すために、豊かな知見や経験を有した学外の関係者を登壇者として招き、新しいメディアを 諸用した観光振興による地域活性化に関して、メディア・コミュニケーション研究院、国際広報メディア・観光学院及び観光学高等研究センターにおける教育研究の成果の一端を社会に還元すべく、地域内外のコミュニケーション行為を促すことによって地域における集客交流を拡大していく可能性や、

それを実現するための適切な方策のあ り方について討論しました。

シンポジウムでは前半に2つの基調 講演、後半にはパネル討論を実施しま した。1つめの「インターネットで変 わる観光」と題した基調講演では、ト リップアドバイザー株式会社代表取締 役の牧野友衛氏から、スマートフォン を中心としたオンライン情報によって 旅行者の行動がいかに大きく変化して いるか、豊富な実証的データに基づき ながら示しつつ、旅行者がどのような 情報を何から入手し、それがどのよう な旅行行動につながっているのかを的 確に分析することの重要性を説き、今 や「旅行者が観光を定義する時代」が 到来したとの認識で話を締めくくりま した。2つめの基調講演「デスティ ネーション・マーケティングにおける メディア活用戦略」では、メディア・ コミュニケーション研究院の北村倫夫 教授から、カスタマー・ジャーニーの 分析やメディア・ミックスの活用にも とづいたデスティネーション・マーケ ティングの海外における先進事例が紹 介され, 日本の諸地域もそれに学ぶ必 要性があると強調されました。

休憩をはさんで実施したシンポジウ ム後半のパネル討論では、まず3人の 登壇者からそれぞれ独自の知見に基づ いた論点の提示がありました。美瑛町 長の角和浩幸氏は、美しい風景写真を 通して喚起された観光が、地域農業に 与えてきた悪影響を克服するためにな

されている町による政策的な取組み や、クラウドファンディングを活用し た農業者のプロジェクトなどの、観光 と地域の「Happyな関係」を志向する 新しい試みを紹介しました。続いて登 壇した北海道放送株式会社編成局の田 中正人氏は、北海道放送が制作した番 組を香港をはじめとした海外諸地域に 販売したり,海外の放送局と協力して 北海道を題材とした番組制作を実現す ることによって、北海道のイメージを 高めてインバウンド観光の振興に貢献 する事業を紹介しました。最後に株式 会社エフエムもえる代表取締役社長で ある佐藤太紀氏は、地域に関する情報 を住民同士で共有することを目指した 地域エフエムの運営からはじまった事 業について、地域外からの視線や評価 を意識して地域資源の価値を見直すこ との重要性に気づいたことによって, 観光まちづくりを目指したものに展開 していった経緯について語りました。

こうした3つの発表の後に1時間余 りの時間でパネル討論が行われ、観光 学高等研究センター木村 宏特任教授 をモデレーターとして、上記3名に加 えて観光学高等研究センター山村高淑 教授もパネリストとして参加し、観光 とメディアはそれぞれ何を媒介する手 段なのか、また観光とメディアはどの ような補完関係にあるのかといった点 について活発な議論が展開されまし た。最後に、新しいコミュニケーショ ン環境のもとで変容しつつある観光の

可能性を今後の地域社会で探っていく ことができる人材には、カスタマー主 導のオンラインメディア、組織的に展 開されるマスメディア、それぞれの特 質を活用しながら、社会の動向を見極 めるための適切な学的視点が求められ るという点を確認した上で, そうした 人材を養成するためには今回のシンポ ジウムのような産官学の情報共有の場 を用意していくことが極めて有効に機 能するはずであるという見通しを、講 演者, 登壇者およびフロアの参加者で 共有して討論を終えました。

本シンポジウムは国土交通省北海道 運輸局. 経済産業省北海道経済産業 局, 北海道, 札幌市, 公益社団法人北 海道観光振興機構、公益財団法人はま なす財団から後援をいただいたことも あり、当日の会場は大学関係者のみな らず, 中央官庁, 地方自治体, 諸法人 組織の職員をはじめ、メディア、出 版,運輸,ホテル,製造,金融,小売 等々の, 文字どおり多様なバックグラ ウンドを有した180名ほどの参加者で 活況を呈しました。今回の企画の成功 に力を得て, 今後も学内外の協働によ る教育研究の推進と地域への貢献を継 続していきたいと考えています。

(メディア・コミュニケーション研究院/ 国際広報メディア・観光学院/ 観光学高等研究センター)



牧野氏による基調講演「インターネットで変わる観光」



パネル討論「ウチ/ソトのコミュニケーションと観光交流の拡大」

低温科学研究所が基礎生物学研究所と連携協定を締結



協定書を取り交わす福井所長(右)と阿形所長(左)

12月9日 (月), 低温科学研究所は 基礎生物学研究所(大学共同利用機関 法人自然科学研究機構) と連携協定を 締結しました。当協定は、両研究所が これまで長年にわたり培ってきた研究 協力関係を基盤として、より緊密で組 織的な連携関係を構築することによ り、低温科学及び基礎生物学分野の研 究を発展させることを目的としていま す。

基礎生物学研究所で行われた調印式 において、福井 学低温科学研究所長 は「相互の研究開発能力及び人材を活 かして総合力を発揮することにより. 低温科学及び基礎生物学分野の研究と 教育の発展に新たな重要な役割を果た したい」と抱負を述べました。

また, 阿形清和基礎生物学研究所長 は.「基礎生物学分野において双方の 研究所の強みを活かして緊密な連携を 行うことにより発展的な研究成果が期 待され、意義のある締結と考えてい る」と発言されました。

調印式の後には、福井所長および本

研究所の山口良文教授による研究セミ ナーが開催され、互いの研究状況に関 する活発な意見交換が行われました。 今後、両研究所の研究交流がますます 活発に行われることが期待されます。

(低温科学研究所)



調印式における関係者集合写真

2019年度北極域課題解決人材育成講座 「北極域科学概論」開催報告

11月21日 (木)・22日 (金) に、北 極域研究共同推進拠点*主催で、2019 年度北極域課題解決人材育成講座「北 極域科学概論」を、札幌と東京の2会 場(2元中継)で開催しました。急激 な海氷の減少や環境変動が進行する北 極域では、温暖化やそれに伴う異常気 象が生態系と人々の暮らしや社会に及 ぼす影響が顕在化しつつある一方、資 源開発や北極海航路利用の可能性が高 まるなど、世界的に北極域における経 済活動やガバナンスへの関心が高まっ ています。

本講座は、自然科学から人文・社会 科学、工学まで第一線で活躍する研究 者を講師陣に招き、俯瞰的な視野を持 ち北極域の課題解決に貢献する人材の 育成を目的としています。講義分野は 北極域を網羅する「地理と歴史」、「海 洋」、「雪氷・積雪」、「大気」、「海の生 態系」、「陸の生態系」、「人間と社 会」、「ガバナンス」、「資源開発」、「北 極海航路」です。受講者には事前に受 講動機を記入いただき、多様な25名の 受講者(民間企業等8名,官公庁2

名,大学・研究機関等15名(学生6名 を含む)) それぞれが今後の業務や研 究活動などへの期待を整理したうえで 本講義に臨みました。

各講義では、温暖化による海氷や永 久凍土の減退の原理とその影響, 日本 の気候変動に及ぼす影響, 国際関係や カナダ先住民の現実的対応など、直面 する北極域の課題について活発な質疑 応答が行われました。また, 自己紹介 や交流会の中でも、学生からは将来の 進学・進路に対する思い、社会人から は環境変動の再認識や今後の職務への 活用など多くの意見交換がなされ、休 憩時間も講師と参加者, また参加者同



「陸の生態系」の講義の様子 (札幌会場・北海道大学)

士が話し合う場面も多く見られるなど 大いに盛り上がりました。

また来年も同時期に開催する予定で す。

*北極域研究共同推進拠点

下記三施設で構成。

- ・国立大学法人北海道大学北極域研究セン ター (中核施設)
- ・大学共同利用機関法人情報・システム研 究機構国立極地研究所国際北極環境研究 センター (連携施設)
- ·国立研究開発法人海洋研究開発機構北極 環境変動総合研究センター (連携施設)

(北キャンパス合同事務部)



「人間と社会」講義の質疑応答の様子 (東京会場・海洋研究開発機構東京事務所)

第8回北極域オープンセミナーを開催

12月12日(木), 北極域研究共同推 進拠点*主催による第8回北極域オー プンセミナーを,海洋研究開発機構東 京事務所にて開催しました。

地球温暖化による海氷減少などの北 極域の大きな環境変化を背景とし、石 油・LNGをはじめとする資源開発や 海運ネットワーク,農林水産業,観 光、通信など社会的・経済的変化に直 面している北極域の持続的利用の期待 が高まっています。本セミナーは、主 に企業や官公庁の関係者の皆様に北極 域の最新情報を提供すると共に、北極 域に関する新たな産業や共同研究への 新規参入の需要を喚起することを目的 としています。

今回は,「北極域石油・ガス開発の 現状と展望 | を主題とし、ロシアを中 心とした北極域の石油・ガス開発状 況, 特にヤマルLNG-PJとそれに続く Arctic LNG 2-PJに関する最新情報を

提供しました。また、石油・ガス開発 並びに北極海航路利用による海上輸送 の期待と課題、国際・国内環境法の役 割,持続可能性と生態系,先住民,地 域社会への影響、今後の方向性や異分 野・産学官連携の貢献や期待などにつ いて議論しました。

産業界を中心に約50名を超える多く の方々が参加し、活発な質疑応答や交 流がなされ盛会裡に終了しました。

*北極域研究共同推進拠点

国立大学法人北海道大学北極域研究セン ター (中核施設), 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構国立極地研究所国 際北極環境研究センター (連携施設), 国 立研究開発法人海洋研究開発機構北極環境 変動総合研究センター (連携施設) の3基 幹による連携ネットワーク型の共同利用, 共同研究拠点。

(北極域研究センター)



講演「ロシア北極域石油・ガス開発の戦略と動 向」における質疑応答の様子



講演「北極圏の石油・ガス開発に係る国際環境 法とヤマル地域の国内環境法の役割と影響」に おける質疑応答の様子

スラブ・ユーラシア研究センター2019年度冬期国際シンポジウ ム「帝政ロシアの地方再訪:文学的想像力と地政学」を開催

12月12日 (木)・13日 (金), スラ ブ・ユーラシア研究センターにおい て、2019年度冬期国際シンポジウム 「帝政ロシアの地方再訪:文学的想像 力と地政学」を開催しました。

スラブ・ユーラシア研究センター は, 近年, ユーラシア地域大国の比較 や境界研究など, 周辺諸国との関係や 世界の中にロシアや中東欧を位置付け ることに取り組み, ロシアや中東欧以 外の専門家との連携を拡大・強化して きました。今回の国際シンポジウム は, 旧ロシア帝国の領域から研究者を お招きし、ロシア帝国・ソ連内部の地 域の多様性について再考し、新しい研 究課題を新しい協力者とともに構想す る第一歩となりました。

今年、本学はスラブ・ユーラシア研 究センターが提案部局となりモスクワ の高等経済学院 (HSE) と交流協定を 締結しましたが、本シンポジウムは、 HSEの国際研究プロジェクト「ロシア の地方史」(研究代表者:エカチェ リーナ・ボルトゥノヴァ教授)

[https://www.hse.ru/rrh/] との共 催で実施されました。このプロジェク トとスラブ・ユーラシア研究センター の持つ人脈によって、ロシアの地方で 斬新な成果を生み出している研究者に 参加いただくことができました。した がって会議の言語はロシア語を主と し、英語を補助言語としました。

今回のシンポジウムでは、ロシア帝 国の多様な人々が描いた文学的・地政 学的な想像力に着目しました。そうす ることで, 国家権力との関係のみで意 味が与えられがちな地方に関する歴史

記述に対して, 地域の人々の主体性が ロシア史・ソ連史を形作ってきた側面 に光を当てることができました。第1 セッションから第5セッションまで 様々なテーマで実施し、2日間での延 べ参加人数は119名(うち外国人59 名)で、議論は大いに盛り上がりまし た。参加者からは、ロシア語でこれほ ど濃密で高度な議論ができるのは国内 では北海道大学スラブ・ユーラシア研 究センターしかなく. 世界でも稀有で あると評されました。

(スラブ・ユーラシア研究センター)



第1セッションの様子(マイクを握っているの がボルトゥノヴァ教授・右から3番目)



熱心に聞き入る参加者

中谷宇吉郎揮毫の書画を大学文書館で受贈

大学文書館では、11月5日(火)、 中谷宇吉郎博士揮毫の書画1点(掛け 軸)を、青山康彦様からご寄贈いただ きました。書画は、青山様のご尊父で ある石川健康氏の旧蔵品です。12月2 日(月)には、中谷博士の旧友による 回想記事(和達清夫「中谷宇吉郎君」, 1983年12月5日付『産経新聞』夕刊) も、青山様から受贈しました。

中谷博士と石川氏とのつながりは、 ご令兄の松隈健彦氏を介してありまし た。中谷が東京帝国大学理学部物理学 科に在学していた頃, 松隈氏は助教授 として理学部で教鞭を執っていまし た。その後、北海道帝国大学理学部物 理学科に赴任した中谷を石川氏が訪問 し、この書画が贈られたとのことで

書画は、書籍(物理学専門書)の水 墨画が描かれ、讃には「壺中天地有」 と書かれています。「壺中に天地有 り」と読み下すことができます。

「壺中の天地」とは、仙人が壷の中 にある理想郷で遊んだという『後漢 書』方術列伝に基づく故事成語で、俗 世間を離れた別世界をあらわしていま

一方、中谷の同僚であった堀健夫教 授は、『壺中の天地 分り易く解いた 相対性理論』(理学モノグラフ3, 北 方出版社、1947年9月)という書籍を 著しています。堀は、科学者の実験室 を「壺中」に喩えました。実験室は狭 いけれども、望遠鏡を通して遥か彼方 の天体を望んだり、原子や電子など極 端に小さい世界を覗いたりしている一 一壺は外から狭く見えても、壺の中の 天地は限りなく広い、と述べていま

今後, 受贈資料は, 大学文書館で大 切に保存し、資料見学会や展示等によ り広く紹介してまいります。

(大学文書館)



壶中天地有

■博士学位記授与

12月25日(水)に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士は18人、及び本学に学位論文を提出してその審 査, 試験等に合格した論文博士は2人でした。なお, 被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

(学務部学務企画課)

課程博士

	博士の学位を授与された者							
分野の名称	氏 名	- 						
博士(文学)	*************************************	中国映画における分身の表象に関する史的研究 主査: 教授 応 雄						
	ズ1 ギョウ セ4 隋 暁 静	日本語の会話におけるフェイスバランス調整行動に関する語用論的研究 - 自己卑下発話を中心に- 主査: 教授 加藤 重広						
	うち なみ ゆう stけ 打 浪 雄 介	強度変調放射線治療において胃の呼吸性移動が及ぼす影響についての研究 主査: 准教授 七戸 俊明						
博士(医学)	松岡里湖	ドナー T細胞のMyD88シグナルは同種造血幹細胞移植後の移植片対宿主病を増悪させる 主査: 教授 橋野 聡						
	森田 亮	放射線治療用病変識別マーカーの経皮的留置術に関する研究 主査:准教授 神山 俊哉						
博士(獣医学)	小 出 健太郎	Studies on the antibacterial activity of novel fluoroquinolones against quinolone resistant Salmonella Typhimurium (キノロン耐性Salmonella Typhimuriumに対する新規フルオロキノロンの抗菌作用に関する研究) 主査:教授 鈴木 定彦						
博士(水産科学)	9 27 27 本 成 澤	Phylogenetic and molecular biological study of nitrogen transporters in Bangiales (Rhodophyta) (原始紅藻類における窒素トランスポーター系統的および分子生物学的研究) 主査:教授 岸村 栄毅						
博士(環境科学)	チャン リャン 常 亮	Protected area-people connectivity in Qinling Zhongnanshan UNESCO Global Geopark, China						
博士(農学)	Nguyen Thanh Tam	The genome constitution of rice resources in the Mekong Delta and their association with salinity stress (メコンデルタにおけるイネ栽培系統集団のゲノム構成と塩ストレスとの関連性) 主査: 教授 貴島 祐治						
	カリファ Khalifa モハンマド Mohammad ヘラル Helal	Raman Microscopic Histology Using Machine Learning Techniques for Non-Alcoholic Fatty Liver Disease (非アルコール性脂肪肝疾患における機械学習技術を用いたRaman組織学) 主査:教授 小松崎 民樹(電子科学研究所)						
I+ 1	小出亮介	Creation of anticancer nanomedicine targeting lysosomal glycosidases (がん細胞のリソソーム糖分解酵素を標的とするナノ医薬の創出) 主査: 教授 西村 紳一郎						
博士(生命科学)	マーティン Martin フラウエンロブ Frauenlob	Study on the control of the double network hydrogel surface-bulk transition and its effect on mesenchymal stem cells (ダブルネットワークゲル表面-バルク転移の制御およびその間葉系幹細胞への影響に関する研究) 主査: 教授 襲 剣萍						
	松田昂大	Study on the self-growing materials in response to mechanical stimuli using double-network system (ダブルネットワークシステムを用いた力学応答自己成長材料に関する研究) 主査:教授 襲 剣萍						

	博士の学位を授与された者	
分野の名称	氏 名	- 博 士 論 文 名
博士(教育学)	が 端 由美子	雇用共稼ぎ化社会における転勤問題とその配慮 - 女性従業員の配偶者転勤に対する企業の配慮 施策に着目して -
		主査: 准教授 駒川 智子
		第二言語作文のためのプレライティング・ディスカッションにおける母語の活用とその効果 -
博士 (学術)	佐野愛子	バイリンガル・アプローチの見地から-
		主査: 教授 河合 靖
		Surface Chemistry of Cationic-Ligands-Protected Gold Nanomolecules: Ligand Exchange,
		Protonation, and Menshutkin Reactions on Au ₂₅ Cluster
	サーブアン グン 仲	(カチオン性リガンド保護金ナノ分子の表面化学:金25量体クラスター上でのリガンド交換・
		プロトン化とメンシュトキン反応)
		主査: 教授 米澤 徹
		A multicriteria analytical framework for quantifying the sustainability of concrete materials
	オポンジョエル	under methodological uncertainties
博士 (工学)	OPON Joel	(コンクリート材料の持続可能性の定量化に向けた方法論的不確実性を考慮した多基準分析の
	Galupo	枠組みの構築)
		主査:准教授 HENRY Michael Ward
		Domestic wastewater treatment and electricity recovery by a PVDF-based air-cathode MFC
	コフィンダ	coupled with a low voltage booster multiplier
	KOFFI N'Dah	(低電圧昇圧増倍器を搭載したPVDF-based air-cathode MFCによる都市下水処理および電力
	Joel	回収)
		主査: 教授 岡部 聡

論文博士

博士の専攻	博士の学位を	授与された者	
分野の名称	氏	名	博 士 論 文 名
博士(観光学)	加藤	門	港の観光空間の創造に関する基礎的研究 主査: 教授 西山 徳明
博士(保健科学)	鈴木	哲平	先端医療情報技術の普及と導入効果予測に関する研究 主査: 教授 齋藤 健

■諸会議の開催状況

役員会(令和元年12月9日)

- 議 案・令和元年度教育研究総長表彰について
 - ・令和元年度教育研究支援業務総長表彰(貢献賞)について
 - ・令和3年度概算要求の基本方針について
- 協議事項・「退職教員(本学定年年令を超える者)の非常勤講師の採用について」に係る対象科目の追加について
- 報告事項・平成30年度に係る業務の実績に関する評価の結果について
 - ・第3期中期目標期間における財政シミュレーションの見直しについて
 - ・ 令和元年度財政状況及び第3期中期目標期間の財源見通しについて
 - ・令和元年人事院給与勧告について

教育研究評議会(令和元年12月18日)

- 議 題・「退職教員(本学定年年令を超える者)の非常勤講師の採用について」に係る対象科目の追加について
- 報告事項・平成30年度に係る業務の実績に関する評価の結果について
 - ・令和3年度概算要求の基本方針について
 - ・第3期中期目標期間における財政シミュレーションの見直しについて
 - ・総長選考会議における選考方法等について

役員会(令和元年12月23日)

- 議 案・「退職教員(本学定年年令を超える者)の非常勤講師の採用について」に係る対象科目の追加について
 - ・目的積立金の活用事業について
 - ・設備災害復旧関係予算(平成30年度補正予算(第2号))について
 - ・現コーポレートカードの解約及び新コーポレートカードの導入について
- 協議事項・職員宿舎料等の改定について
 - ・就業規則関連規程の一部改正について
- 報告事項・会計検査院による平成30年度決算検査報告について
 - ・令和元年度補正予算(案)について
- ※規程の制定,改廃については,「学内規程」欄に掲載しています。

■学内規程

国立大学法人北海道大学創成研究機構グローバルファシリティセンター分析・加工受託規程の一部を改正する規程 (令和2年1月1日海大達第1号)

本学の創成研究機構グローバルファシリティセンターにおいて, 材料分析又は加工に使用する設備を追加することに伴い, 所要の改正を行うとともに, 併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程

(令和2年1月1日海大達第2号)

令和2年1月1日付けで、本学におけるテニュアトラック制度のうち、テニュアトラック期間を原則として10年とする外国人教員を対象とした制度において、セーフティネットとして再任できる仕組みを設けること及び国立大学経営改革促進事業により、本学における部局テニュアトラック認定制度の一環として、准教授を対象とした「アンビシャステニュアトラック制度」を新たに導入することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程

(令和2年1月1日海大達第3号)

本学のオープンファシリティについて、設備の追加及び負担金の変更を行うことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

■研修

研修名:令和元年度国立大学法人北海道大学会計職員アドバンス研修「データ収集・分析力研修」

開催期間:令和元年12月10日(火)

開催場所:附属図書館本館リテラシールーム

研修目的:会計職員アドバンス研修は、適切かつ効果的な大学運営に資するため、自発的で意欲の高い職員を対象に、大学

の運営や経営に関する知識・能力を習得させることで、大学経営を支える人材となり得るスーパージェネラリス

トを養成することを目的とする。

そのうち、令和元年度については、業務上で取り扱うデータの収集力・分析力を向上し、課題解決のため主体 的に行動できる職員を養成することに重点を置いた。





グループワーク



説明を受ける受講生



修了証書授与

(財務部主計課)

研修名:令和元年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

開催期間:令和元年12月9日(月)

開催場所:情報教育館3階スタジオ型研修室

研修趣旨:学生指導,学生支援及び学生サービス業務を円滑かつ適正に行うために必要な基本的知識,対応能力等を習得す

ることにより、学生支援担当職員としての能力の向上を図ることを目的とし、「障害学生への合理的配慮」を

テーマに、九州大学及び本学高等教育研修センターの講師による講義とワークショップを実施する。



開会挨拶(関 靖直理事・事務局長)



講義・ワークショップ(高等教育研修センター 山本堅一特任准教授)



ランチミーティング



集合写真

(学務部学生支援課)

■表敬訪問

海外

年月日	来訪者	来訪目的
1 .12.10	中国科学技術部 辦公庁 Liu Yuxin 副主任	両国の交流に関する懇談
1 .12.17	駐日フィンランド大使館 Pekka Orpana大使	両国の交流に関する懇談
1 .12.17	駐日オーストラリア大使館 Richard Court 大使 オーストラリア貿易投資促進庁 Brett Cooper 北東アジア担当ジェネラルマネー ジャー 在札幌オーストラリア領事館 Ronald Green 領事	両国の交流に関する懇談及びアンバサ ダー委嘱式



中国科学技術部 辦公庁 Liu Yuxin 副主任(前 列中央左)



Pekka Orpana駐日フィンランド大使(中央左)



Richard Court 駐日オーストラリア大使(前 列右から2番目)

オーストラリア貿易投資促進庁 Brett Cooper 北東アジア担当ジェネラルマネージャー(後列 右から3番目)

Ronald Green 在札幌オーストラリア領事(前 列右)

(国際部国際連携課)

▮人事

令和元年12月31日付発令

新 職 名(発令事項)	氏	名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 (転出) 京報上於教授	ж п	#: -	惠/二 7
京都大学教授	藤田	恭之	遺伝子病制御研究所教授

令和2年1月1日付発令

新職名(発令事項)	A		3	名	旧職名(現職名)
【教授】 遺伝子病制御研究所教授	藤	田	恭	之	京都大学教授 (京都大学を本籍機関としてクロスアポイントメント適用)
国際連携研究教育局·大学院情報科学研究院教授 創成研究機構化学反応創成研究拠点·国際連携研究教育局·大学院情報科学研究院教授		村 岡	博真	紀治	創成研究機構化学反応創成研究拠点·国際連携研究教育局·大学院情報科学研究院教授 国際連携研究教育局及·大学院情報科学研究院教授

■訃報

旭 氏 名誉教授 鈴木 (享年90歳)



名誉教授 鈴木 旭先生が令和元年 11月12日にご逝去されました。ここに 謹んで哀悼の意を表します。

先生は函館市にお生まれになり、昭 和27年3月に北海道大学農学部農業経 済学科を卒業後, 東京商科大学聴講生 を経て、昭和28年2月北海道大学水産 学部助手に採用されました。その後, 昭和45年3月に北海道大学助教授、昭 和58年4月に同教授に昇任され、平成 4年3月停年により退職されました。 平成4年4月に本学名誉教授になられ た後は、平成5年9月から平成12年3 月まで、函館大学商学部教授を務めら れました。

先生は永年にわたって水産経済学の 教育, 研究に努め, とりわけ漁業制度 に関する研究に注力されました。先生 が研究された「漁業権制度に関する研 究」は、明治漁業法に関する当時の漁 業実態を踏まえた歴史的性格の分析に 基づき, 戦後漁業制度改革の意義と改 正漁業法の社会経済的性格を解明した ものであり、その成果は漁業経済学会 においても高い評価を得られました。

また、先生は水産物市場や漁業経営 に関する研究, 及び日ソ漁業関係に関 する研究にも精力的に取り組まれ, 水 産物の流通及び価格形成における生産 者による販売活動の機能とその意義を 明らかにし、その後の産直活動や6次 産業化の取組に対して、多くの基礎的 な知見を提供し、それらの発展に寄与 されました。

この間、学内では水産学部漁業学科 学科長や北海道大学公開講座委員会委 員などを務め、大学運営で重要な役割 を果たされるとともに, 水産学部の発 展に大きく寄与されました。また、学 外においては, 北海道立総合経済研究 所特別研究員, 北海道水産業振興審議 会委員を務められたほか、函館市史編 纂編集委員在任中は『函館市史・通説 編』の編集・執筆に当たられ、地域連 携の面でも大きく貢献されました。

このように、先生は永年にわたって 学術の振興. 教育の推進. 人材の養 成、大学の管理・運営、地域の振興に 多大な貢献をなされ、そのご功績は誠 に大きなものです。

先生の永年にわたるご貢献に改めて 感謝し、ここに謹んでご冥福をお祈り 申し上げます。

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)

編集メモ

●東京都神保町にある学士会館には, ださい。3月中に展示内容のリニュー アルを予定しております。

●受験シーズンを迎え, 1月18日(土), 北海道大学の展示ブースがあります。 19日(日)には、大学入試センター試 お近くにお越しの際には、ぜひご覧く 験が本学でも実施されました。当日は 大きな混乱もなく、試験は無事終了し ました。



北海道大学展示ブース





試験会場の外の様子



2015.1.25 釧網本線 標茶~磯分内 (標茶町)

北の鉄道風景 82 鉄馬駆ける

自動二輪車を意味する「鉄馬」という呼称は、本来は蒸気機関車(Steam Locomotive: SL)を指すものである。我が国でのSL牽引による旅客及び貨物列車の定期運行は1975年をもって終了した。しかしその後、観光列車という形態でSL牽引列車の復活運行が各地で行われることとなり、現在に至っている。道内では、標茶町に保存展示されていたC11型 171号機がJR北海道によって動態復元された。そして、2000年1月より、観光列車「SL冬の湿原号」として

釧網本線で毎冬運行されてきた。写真は鉄馬と道産子が共に駆ける光景、今から5年前の「SL冬の湿原号」運行開始を記念して開催されたイベントでの一コマである。同列車は今冬で運行開始20周年の節目を迎えた。冬の道東地方の観光を牽引する列車としての末永い活躍を期待したい。

情報科学研究院 准教授 山本 学